




**2021年度  
多文化共生に向けた  
アートプロジェクト記録集**



**2021年度  
多文化共生に向けた  
アートプロジェクト記録集**

# 2021年度 多文化共生に向けた アートプロジェクト記録集

はじめに ——— 4

## 1 多文化共生×東京芸術劇場 公開レクチャーシリーズ〈全3回〉 5

### 「アーティストの視点から多文化社会を捉える」

概要

vol.1 オンラインレクチャー&トーク

「多文化共生とアート」高山明

vol.2 トーク&パフォーマンス

「東京に住む外国人の声と影」東京影絵クラブ（宮本武典+川村亘平斎）

vol.3 トーク&パフォーマンス（ワークインプログレス）

「海外にルーツを持つアーティストと多文化共生」y/n（橋本清+山崎健太）

## 2 日本語教室ワークショップ〈全5回〉 33

概要

第1回 「タクシーに乗る」

第2回 「病院に行く」


第3回 紙芝居をつくってみよう・やってみよう

第4回 歌うこと・自分のことを話すこと・人の話を聞くこと

第5回 日本語とつながるワークショップ 「このコトバは、どんなカタチですか？」

## 3 劇場ツアー〈やさしい日本語〉編 45

## 4 シアター・コーディネーター養成講座 《多文化共生・基礎編》 49



## はじめに

東京芸術劇場では、2021年度より国籍や言語、文化や習慣などが違う人々も共に活躍する多文化社会を目指し、「多文化共生に向けたアートプログラム」に取り組んでいます。

東京に住む外国人は約52万人（2022年1月時点）、180以上の国や地域の人々が暮らしており、コロナ禍により在住外国人の増加傾向は一旦歯止めがかかっていますが、長期滞在化や国籍の多様化が進んでいます。一方で、外国にルーツをもつ子どもたちの就学・教育、外国人労働者の労働環境、日本語や日本の習慣、社会保障等の様々な課題が浮き彫りとなっています。

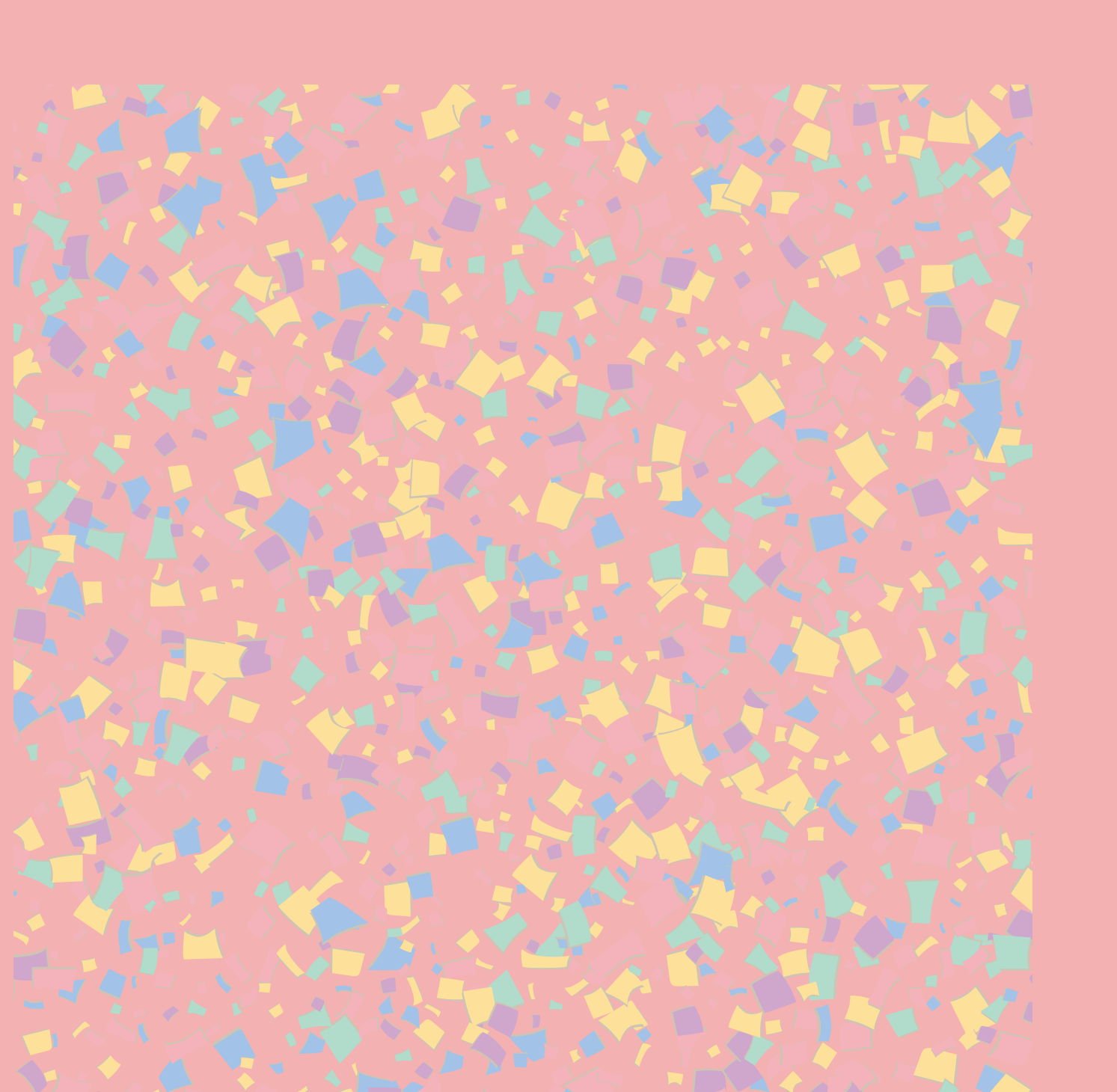
在住外国人、外国にルーツをもつ人々と言っても、東京においては、一括りにできない多様な国籍・文化・在留資格・生活環境があります。公共劇場として「アートと多文化共生」に主眼をおいた本プログラムを開始するにあたり、まずは、どのような人々が東京に住んでいるのか、どのようなアプローチが可能か、どのような考え方を持つべきか、手探りで進めてまいりました。

そういった中で、芸術文化による対話・表現活動により、外国にルーツをもつ人々がさらに日本に親しみをもち社会参画しやすくなること、また、人々が多様性を尊重し、その違いから想像力・創造力が育まれることを目指し、2021年度は次の4つの取組を実施いたしました。

1) アーティストの視点から多文化共生を紐解く公開レクチャー、2) 在住外国人が日本語を学ぶ日本語教室でのワークショップ、3) 「やさしい日本語」を活用した劇場ツアー、4) アートと多文化共生を考える人材育成のための講座です。

本プログラムを通して、外国人支援に関わる方々、多文化共生に関心のある方々、研究者の方等、これまで接することのなかった方々とのネットワークが広がりました。これからも試行錯誤を繰り返してまいります。この記録集を通して、劇場や芸術団体、外国人支援に関わる人々に限らず多くの方に関心をもっていただき、今後の展開の参考となり実践につながっていくことを願っております。

東京芸術劇場 人材育成担当



## 多文化共生×東京芸術劇場 公開レクチャーシリーズ



## 事業について

国籍や習慣、言語などが違う人々が共に生きる多文化社会とどう向き合うのか。

国内外で移民・難民とのアートプロジェクトを演劇を軸に展開する高山明氏、東京に住む外国籍の人々の声を集め影絵として浮かび上がらせる東京影絵クラブ（宮本武典氏、川村亘平斎氏）、自らの言葉で観客に語りかけるレクチャー・パフォーマンスという形態で活動するとともにメンバーがブラジルにルーツをもつy/n（橋本清氏、山崎健太氏）の3組のアーティストを迎え、トーク・パフォーマンスを通して、多文化共生について考える公開レクチャーを実施しました。



## 事業データ

### ● vol.1

2021年12月8日(水) 19:00-21:00

オンラインレクチャー&トーク / 「多文化共生とアート」

高山明 (Port B主宰・演出家)、モデレーター: 肥高菜実 (美術家、文筆家)

会場: オンライン (Zoomを使用)

参加者数: 44名

### ● vol.2

2022年1月25日(火) 18:30-21:00

トーク&パフォーマンス / 「東京に住む外国人の声と影」

東京影絵クラブ 宮本武典 (キュレーター) + 川村亘平斎 (影絵師・音楽家)

会場: 東京芸術劇場シンフォニースペース

参加者数: 41名

### ● vol.3

2022年3月19日(土) 15:00-17:00

トーク&パフォーマンス (ワークインプログレス) / 「海外にルーツを持つアーティストと多文化共生」

y/n (橋本清+山崎健太)、モデレーター: 若林朋子 (プロジェクト・コーディネーター)

会場: 東京芸術劇場シンフォニースペース

参加者数: 39名

vol.1

2021年12月8日(水) 19:00-21:00

オンラインレクチャー&amp;トーク「多文化共生とアート」

高山明 (Port B主宰・演出家)、モデレーター: 肥高菜実 (美術家、文筆家)

## 主旨説明

**司会** これより、「多文化共生公開レクチャーシリーズ アーティストの視点から多文化社会を捉える」第1回目を開始いたします。

本レクチャーは、本年度より東京都歴史文化財団全体で開始した「クリエイティブウェルプロジェクト」、あらゆる人が芸術文化を享受できる環境を整えることを目指した事業の一環で行っております。世界の多くの人々が人種や文化、言語などが異なることによって差別や軋轢が生じていますが、日本でも外国人住民の方が増えるにつれて、地域社会での課題が増加しています。多文化が共存していくためにはなんらかの仕掛けや仕組みが必要ですが、規制や統合によりかかるのではなく、芸術にもその役目を果たせるのではないかと問いかけによってこの企画は始まりました。

第1回目の今夜は、国内外の移民や難民、海外ルーツの人々に目を向け、既存の演劇の枠組みを超えて創作活動を続けてこられた高山明さんを講師にお迎えしております。「多文化共生とアート」と題して、高山さんの取り組みをご紹介いただきながら、美術家・文筆家である肥高菜実さんをモデレーターにお迎えして、お二人でトークを進めていただき、最後に質疑応答の時間を設けます。それでは高山さん、肥高さんどうぞよろしくお願いたします。

## 1. 多文化共生に向き合うきっかけ

**肥高** 本日モデレーターを務めさせていただきます、ライターでアーティストの肥高菜実と申します。多文化共生について考えを深めていくレクチャーシリーズの第一回目ということで、私のほうからも多文化共生というテーマに関心を持つようになったきっかけや自身のスタンスについて手短かにご説明させていただきます。私は小学校・中学校と国際的でフラットな教育環境で育ったため、あまり差別や偏見に触れたことがなかったのですが、大学時代にお付き合いしていた方から交際2年目のタイミングで、在日というルーツとそれを原因にいじめを受けてきたことを告白されたことがあります。彼や彼の家族が悩んだ末に帰化したこと、また2年という時間が示す彼の葛藤に触れたことが、私にとっては歴史や社会に対する無批判的な態度を反省する機会となりました。街を歩いていてもヘイトスピーチをいまだに見かけることがあり、そのたびに今は日本で戦争を経験した人はもうほとんどいないのにどうしてヘイトはなくなるのだろうと考えを巡らせてきました。それは人々が、教科書上の歴史やマスメディアなどの偏った言説に支配

されすぎた結果の悲劇だと胸を痛めています。実際に街の中を歩き、異なる人々の考えと触れることができる高山さんのご活動は一貫して、教科書からこぼれ落ちてきてしまった歴史を掘り取り、向き合いなおすような機会を人々に与えるものであって、尊敬するとともにいつも勉強させていただいております。本日は、劇場を飛びだして街で演劇的な実践をされている高山さんご本人から、その代表的なプロジェクトについていくつかレクチャーしていただけるということですので楽しくしていました。今日はどうぞよろしくお願いたします。

**高山** よろしくお願いたします。モデレーターを引き受けていただきどうもありがとうございます。

お話にあった、どうやって多文化共生に興味を持ったのかということで、僕の場合、ドイツにずいぶん長くいて演劇を始めたり、高校時代はアメリカにいたり、外国人として暮らす時間が比較的多い若者時代を送っていた中で、自分が外国人としてふるまうことを考える時間が比較的多かったと思います。日本に帰ってきて逆の立場になった時に大概それは忘れてしまっていて、まるでここがホームであるかのように暮らしていたのですが、ひょんなことから身近な場がホームでなくなるような、ホームレスになってしまったような体験が何か月かありました。そのときにマクドナルドやインターネットカフェに行ってみると、「マクドナルド難民」や「インターネットカフェ難民」と呼ばれる方がたくさんいらっしゃいました。店に入っただけのところに洗濯物がたくさん干してあったり、マクドナルドは夜中満員で入れなかったり、大きなカバンを持って若い人がスマホで次の日の仕事を探していたりするんです。突然そういう人たちに会って、自分もそういう立場になってみると、ホームってなんだろう、自分が外国人とか難民とかホームレスと呼んでいた人が、ちょっと間違えると自分もそうなるんだな、ということに気づきました。むしろ彼らの知恵、都市や社会の見方を、彼らからどう学ぶのかということも大事だな。自分の演劇活動を振り返ってみても、ブレヒトやワーグナー、ベンヤミンなど、亡命者、難民だった人から学んでいることが多かったです。だから、そういう活動を続けていきたいという思いから自然と扱うようになったというのが、僕が多文化共生的な試みをする背景になります。

## 2. 「ヨーロッパ・シンクベルト」と「マクドナルドラジオ大学」

今日は具体的にどういうプロジェクトをやってきたのかお話ししたいと思い、いくつか資料を用意しました。それを共有させ

ていただきます。まず少し遠い話から始めたいと思います。さきほど僕は長い間ドイツにいたという話をしましたが、いろいろな活動をやっているもう一つのホームグラウンドはドイツやヨーロッパになります。[スライド]ヨーロッパの地図です。1番右下にアテネがあります。左の赤い点がついているところがフランクフルトの中央駅ですね。〈2,259キロメートル、徒歩で459時間〉とあります。このルートは、アフリカや中東からトルコに来て、トルコのイズミルから船に乗ってアテネまでたどり着いた人たちが、徒歩でヨーロッパに入るバルカンルートという代表的なルートでもあります。バルカンルート歩いて入ってきた難民の人たちが2017年頃から増えて、フランクフルト中央駅のホームやその周りも2017年秋頃から景色が変わっていきました。難民と思しき人たちがたむろしていたり、あるいはキャンプがあってそこで保護されていたり、駅の中にそういった風景が広がっているような状態でした。そのとき以来ヨーロッパでは、難民というものをどう受け入れるか、どう排除するべきなのかという議論が沸騰します。そうした中、これをテーマに何とかプロジェクトをやってもらえないか、というお話がいくつかきたのですが、僕は観光客みたいなものだし、別にドイツに住んでいるわけでもないの、最初はお断りしていました。ところが、あらゆる組織が難民問題を扱うようになると、舞台上に難民の人が立って、自分の難民としての苦労話を語る舞台や、アートの作品で難民の人を扱った作品というのがすごく増えたのですよね。どうも直接的すぎるし、感動ポルノもしくは難民ポルノのような作品が非常に増えた。自分はこういうことはやりたくないという拒絶反応が起きたのと同時に、日本でも難民問題を扱っていたので、自分もなにか違うアプローチでできることはないかと考えました。あるときに「ポタリーズ・シンクベルト (Potteries Thinkbelt)」という建築プランを思い出しました。これはセドリック・プライス (Cedric Price) というイギリスの建築家が、1960年くらいに考え出した都市計画のプランです。ポタリーズなので、陶器のシンクベルト、考える帯、思考帯というふうに言っておきます。非常に素敵なプランで、陶器で有名だった街が、陶器

の需要がなくなりだんだん廃れていき、それを消費していた街ばかりが大きくなって、その中に陶器を運んでいた線路が残った。その線路を使って大学をつくらうというプランです。線路脇にセドリック・プライスがインストールしようと考えていた研究施設、大学、それから教員や学生が住む寮が点在しています。このプランは実現しませんでした、このプランに絡めて難民問題を扱えば、自分が直接難民問題を論じるような、土足で踏み入るようなことを避けられるのではないかと思います。このプランと難民問題をなんとか結び付けたいと考えました。アテネからフランクフルトまで、大体アテネからスコピエに入り、ベオグラード、ブタペスト、ウィーンと歩いて、そこから電車でフランクフルトやベルリン、もっと上の北欧に行くのですが、このルートを線路の代わりにして大学ができたなら「ポタリーズ・シンクベルト」が「ヨーロピアン・シンクベルト」みたいなものになるのではないかと妄想しました。

では、どうやってバルカンルートにシンクベルトにできるのだろうか。これはいけそうだという直感は働くのですが、どうやってやればいいのか、当然見当がつかないわけです。それで、難民の方にたくさんインタビューをしました。アテネの隣のピレウスという港に6,000人から7,000人くらいのシリアの人たちがテントをはってコンクリートの上に雑魚寝をしているような場所や、オリンピック施設、空港が難民の人たちの避難所になっているところを訪ねているいろいろな人の話を伺ったことで、どういう状況なのかなんとなくイメージできるころはありました。そういうインタビューが着想のきっかけになって、[スライド]こういうイメージがわきました。これはアテネ、スコピエ、ベオグラード、ブタペスト、ウィーン、フランクフルトに赤い点が点在しています。この赤い点は、マクドナルドです。アテネとスコピエにはあまりないですが、ベオグラードから西にはたくさんのマクドナルドがあります。バルカンルート移動してくる人たちは、実はマクドナルドをうまく使って、それをセーフティーネットとして使いながら移動しているということを何人かの人から聞きました。理由は何かということ、Wi-Fiが使える。あの人たちにとっての生命線はスマホですから、充電できる、人に会えて情報交換ができる、寒ければ暖をとれるし、もちろんご飯も食べられるし、場合によっては寝ることもできる。そういう場所を使いながらヨーロッパまで歩いていく。この一つひとつの赤と黄色の点を大学に変えてしまえば、点がつながって線になってシンクベルトになるだろう。つまり「ヨーロピアン・シンクベルト」がバルカンルート上にできるのではないかと考えたのが、今やっている「マクドナルドラジオ大学 (MacDonald Radio University)」というプロジェクトです。

初めてやったのはフランクフルトのムーゾントゥルム (Mousonturm) という、僕が2014年からアソシエイトアーティストとして契約しているアートセンターです。ウィーンの

### 高山明 (たかやま・あきら) (撮影：奥祐司)

演出家・アーティスト。演劇ユニットPort B主宰。既存の演劇の枠を超え、現実の都市や社会に介入するプロジェクトを世界各地で展開している。近年では、美術、観光、文学、建築、教育といった異分野とのコラボレーションに活動の領域を拡げ、演劇的思考や発想によって様々なジャンルでの可能性の開拓に取り組んでいる。



頃から一緒に仕事をしていて、ヨーロッパで仕事をするときも1番のパートナーであるマティアス・ペース (Matthias Pees) が新しいディレクターになったとき、ここで何かやってほしいと打診がありました。このムーゾントゥルムはプログラムも体制も施設もいい劇場です。でも実際に中に入ってプログラムを鑑賞すると、舞台上には難民の人や肌の色が黒い人、黄色い人、白い人、入り混じって非常に多様性のある演目があるけれど、客席側をみると同じようなお客さんばかりです。インテリで中流階級以上、若い人も多く混じっていて、みんな知的な議論もできる。どうもエリート層なドイツ人が多い。ならばそこを問題にすべきじゃないかということで、ムーゾントゥルムのロゴを使って「マクドナルドラジオ大学」にしたんですね。最初にやったのが2017年の3月2日から約3週間ちょっとです。この嘘のマクドナルドは、1階のカフェを改造しました。「あれ？ムーゾントゥルム、マクドナルドになっちゃったの？」みたいにみんなびっくりして立ち止まって。小学生なんかも「あ、マクドナルドになった！」と。よく一緒に仕事をしている建築家の小林恵吾さんが、普段はシックなカフェを椅子から照明デザインまですべて変えて店舗にしました。ここに来るとご飯も食べられる、ドリンクも飲める、レクチャーが注文できますというのが、マクドナルド大学の特徴です。メニュー表には、ジャーナリズム、クッキング、アーキテクチャ、アーバンリサーチなどいろいろ書いてあって、1ユーロで買えます。つまり、ハンバーガー1ユーロ、コーラ1ユーロ、レクチャーも1ユーロ、というシステムです。どういった授業があったかということ、文学、哲学、生物学、会計学、ジャーナリズムなど、いわゆる大学の科目になるようなものが並んでいます。ここで特徴的なのは、シリア、アフガニスタン、エリトリア、ガーナ、パキスタン、ブルキナファソ、イランといったちょっと変わっている国なのですが、実は難民の人が教授になっています。ただ教授と言っても、本当のアカデミシャンではなくて、全くの素人が教授となって授業をする。その授業が1ユーロで買えるというものなのです。ムーゾントゥルムのカフェを使って、「マクドナルドラジオ大学」をやった一方で、実際のマクドナルドでも展開しました。フランクフルトでは、市内にある7店舗でやらせてもらいました。「マクドナルドラジオ大学」を受けたいと伝えると、ポータブルラジオとシラバスが渡されて、周波数を合わせるとライブレクチャーが聞けます。

[写真] これが授業の様子です。ブルキナファソからきた難民の方がアーバンリサーチの授業をしています。彼はホームレスをしていた時間が長くて、どうやって街でサバイブするのか、

という授業をしてくれました。マクドナルドをどう使うのか、教会や冬場のモスクをどう使うか、夜に公園で寝るときはどういったことに注意すればよいのかなど、アーバンリサーチとして授業をしてくれています。隣の人は掃除をしている本当のマクドナルドの店員さんで、おそらく彼が授業をやっているとは気づいていない。なぜかという、彼はマイクで授業をしていて、それをFMのトランスミッターで拾って飛ばしています。学生はポータブルラジオで聞きます。これが授業の形式です。

[写真] 彼女はシリアのアレッポからの難民です。アレッポでは大きな爆撃を受けて毎日大変な生活を送っていて、ここにとってもいられないということでドイツまで来ました。シリアでは建築学生だったので、彼女のアレッポ復興計画についてレクチャーをしています。ここでは彼女と一緒に磯崎新さんの『廃墟論』を読んで、どうやって廃墟を別の都市計画に活かしていくのかということを考えました。

[写真] 彼はガーナから来た元マラソンランナーです。イギリスの国際マラソンで2位になるような非常に有名なランナーです。ガーナから亡命してフランクフルトに来て、走るとは何か、マラソンとはどういうことか、ということスポーツ学という名のもとにレクチャーしています。隣に聞いている人がいますが、彼らはこの授業をイヤホンで聞いています。なぜマクドナルドなのかということ、ムーゾントゥルムを含め多くの劇場や美術館は、多文化共生、民族・宗教・文化の違いを超えて共生していくのだと訴えます。舞台上には実現しますが1番難しいのが客席のほうで、客席が本当に多文化共生になっているのかどうかは疑問です。これは美術館においても同じで、観るお客さんはそれを理解することができる、問題意識の高い人たちしか来ない。ところがマクドナルドに目をやると、店員さんも客席も本当にインターナショナルで、民族・宗教・文化が入り混じっている。劇場や美術館に来るようなお金持ちの人や意識の高い人は、資本主義の最先端で、食べるものもあまり良くないと、マクドナルドを毛嫌いしているので来ないですが、実際ここにいる難民の人、移民の人、働いている人はここに居場所、避難所を求めている人も多いです。

実は劇場が目指している多文化共生というのは、マクドナルドの客席のほうによっぽど実現されているんじゃないかと思えます。劇場に来て多文化共生に賛成だと頷いて劇場を出てワインを飲んで帰っていくのであれば、まずはマクドナルドに行け、ということをお願いたくてマクドナルドを舞台にしました。だからお客さんはムーゾントゥルムに来るかわりに、マクドナルドに来ないといけない。普段彼らが嗅いでいるレストランの匂いとは明らかに違う。油の匂いだとか、たまに暴れている人たちに会ったり、普段ドイツ語に接している人だったら訳のわからない言語が飛び交ったりしています。そちらの現実のほうで劇場の舞台に繰り広げられる多文化共生を模した作品よりもずっとリアルだということで、かなり敷居が高いのだけど、劇場に来るお客さんにマクドナルドに足を運んでもらうというのが一つの目的でもありました。だからここで授業をやりたいということで、マクドナルドを選びました。

以上が、「マクドナルド大学」及び、ヨーロピアン・シンクベルトの概説になります。

## トーク&質疑応答

**肥高** ありがとうございます。高山さんのお話の中にも出てきたムーゾントゥルムというフランクフルトの劇場は、作品を上演する際の条件として、作品の上演後に市民の間でディスカッションが起こることを条件としていると聞いたことがあります。ヨーロッパは劇場でも美術館でも、問題提起の色の強いストレートな社会派の作品が多いと思うのですが、近年は日本でも「あいちトリエンナーレ2019」での「表現の不自由展」の中止などを経て、劇場やアーティストがアクティビスト的なスタンスで社会派の作品を発表する機会がとて増えたと思います。美術館や劇場に来るほとんどの人はすでに問題意識を持ち、日常的に社会について考えていると思うので、高山さんがおっしゃっていたように、劇場を飛び出して都市を歩いたり、さまざまな人が集めるマクドナルドの中に、いつもとはちょっと異なる風景をつくるような試みがとても重要だと思いました。私も日本の会場で「マクドナルドラジオ大学」を聴講させていただいたのですが、正直聴く人側の多様性についてはまだまだこれからというところがあると思っています。「あいちトリエンナーレ」の後から、日本の劇場は社会的なヨーロッパの演劇アートシーンに寄せていく方向に動いていますが、多様性の理解に向かうつもりが、実はそれが排除になってしまっていることではないでしょうか。例えば、熱心なフェミニストがいつの間にか過剰な男性嫌悪のスタンスに転じてしまうこともあります。こういった例もある中で、劇場の外と中にいる人の両方を射程に入れている高山さんの実践は、社会派のステレオタイプとは異なりますよね。とても微妙なバランスで成り立っている独特な試みだと思います。

**高山** 本当にその通りで、まずこれをやった瞬間にたくさんの批判がありました。新聞への投書だとか、劇場への抗議とか。要するに難民のようなセンシティブな問題をマクドナルドみたいな国際的な資本主義の先端にあるような企業となぜやるのだと。これはアートや演劇の自殺だというような意見が多く寄

せられました。ただ僕が思うのは、今肥高さんがおっしゃってくれたような、社会問題を舞台上に、あるいは作品の中でしっかりと展示する、扱うということの問題も実はあるように思っています。例えば、今劇場に来るお客さんの多くが難民問題に対して考えたいと思っているし、難民は排除するのではなく受け入れるべきだという人のほうが圧倒的に多いと思います。当時は少なくともそうでした。彼らが来て難民問題は大事だよ、受け入れるべきだよ、と。最初から難民問題に興味があってぜひ受け入れて彼らをちゃんとケアしなくちゃいけないと考えている人が、そういう方向の舞台や作品を観ても、問題だけが固定化されてちょっと安心してしまふ。そういう構造があって、むしろそれよりは難民問題に関心のない人や難民は排除すべきだという人に、この問題が少し身近なものとして伝えるにはどうすればよいか考えたほうがいいのではないかと僕は考えています。なので、これはいい作品で、こういった問題は大事だという人たちではなくて、そんなの関係ないと思っている人につながる回路を開けたらいいなと。マクドナルドでやるというのは第一歩です。今アート作品としてやっていますから、アート作品を観に来るお客さんしか来ない。日本に今、数千店舗くらいマクドナルドはフランチャイズがあるらしいのですが、そのフランチャイズー店舗一店舗に、このマクドナルドラジオ大学の難民の人たちの講義がインストールされたら考えると、キッズセットのおまけでポケモンがついてくるように、買ったらたまたま授業がついてきちゃって、時間あるから聞いてみようかと聞いてみたら難民の人の講義だったと。その方が、いわゆる劇場に来ない難民問題に関心のない人たちに、そういった問題があるということ、あるいは難民の人たちが豊かな知恵や知識があるということが伝わるのではないかと、そういった新たな経路づくりをやっていきたいと思っています。そのためには、資本主義とぎりぎり接してしまう、あるいはそれに飲み込まれてしまうリスクを承知の上でやらないと、きれいごとにはいかならないと僕は思っています。

**質問1** マクドナルド側はどのような対応だったのでしょうか。長時間滞留するお客さんがいるため、あまり儲からないという意味で不利益と感じてお断りされる可能性はなかったのですか。

**高山** マクドナルドとの交渉は大変でして、まず劇場側の弁護士からプロジェクトをやったらマクドナルドから訴えられて劇場がつぶされるからやめてくれと言われました。劇場長のマティアス・ベースはいろいろ考えて話し合っ、だからこそやろうと、その代わり徹底して交渉しないといけないというこ

**肥高菜実 (ひだか・まみ)** (撮影: KumiNishitani)

美術家/文筆家。2018年多摩美術大学絵画学科油画専攻卒業。同年より『美術手帖』『i-D Japan』『tattva』などカルチャー誌を中心に執筆中。『She is』ではエッセイ「孤島にて」を連載(〜2021年3月)。主にアートを通じてジェンダーやポスト資本主義などの社会問題に言及する。近年は執筆業と作品展示のほか、メディアや展覧会のキュレーションサポートなどへと活動を拡張。主な展覧会に「静謐な光、游泳のかたち」(2020)。

とで交渉を始めました。マクドナルドのいいところは担当者の力が大きいということ。パーガーさんという人がいて、パーガーさんがおもしろそうだからやってみたいねとのって来て、そこが入口になって議論ができました。もちろんマクドナルドの中はプライベートではなくパブリックな空間なので、本当に授業をやられたら困るけれども、ラジオを使うのであればみんなバラバラに散るからいいねと許可をもらいました。ただし、コーヒーでもコーラでもなんでもいいから一個は買い物してねということでした。いろいろな場所で行ってききましたが、毎回交渉が非常に大変でした。

**肥高** 実際に街の中に出てパブリックな場所を使うアートプロジェクトって交渉が一番時間がかかりますね。

**高山** 大事なところですよ。だから良いという面もあって、劇場や美術館だと、今いろいろな検閲もありますが、中である程度守られた状況でできるのでリスクは高くないです。でも企業とやると訴えられるなど、検閲というレベルではなく法的な問題となることが多くあるため、交渉と法律に則るとするのは非常に重要だと考えています。

**質問2** 多文化共生という問題においては言葉や言語が一つの重要なキーになるかと思いますが、プロジェクトでは何語だったのでしょうか？

**高山** これは本当にポイントで、シリアから来た難民の人がなぜドイツ語で授業をやっているのか、あるいはブルキナファソから来た彼がなぜ英語でやっているのか、これはポリティカル・コレクトネス的にはおかしいと思います。彼は彼の言葉でやるべきだとなると思うのですが、全部ドイツ語か英語でやっています。なぜかというお客さんがそうだからです。どうも難民の人はドイツに来ると、ドイツ語ができないと社会的なポジションをもらえないんですね。そこが大きなネックで、ドイツ語がどのくらいできるのかということがその人のアイデンティティになってしまう。そういう国で生きていく以上、それができないなら出て行ってくださいとなってしまうので、授業をつくるプロセスを学習の場にしようということでドイツ人についてもらって僕やドラマトゥルクの人が授業をつくっていくのだけでも、その授業をつくるプロセス自体がその人のドイツ語、もしくは英語の学習の助けになるような現実路線を選びました。これは矛盾したポイントなのですが、わざわざやったほうがおもしろいなというのが僕の考えです。

**質問3** 教授としてレクチャーをされていた難民の方々はどのようにして集めたのでしょうか。また、このプロジェクトを通して難民の方への影響や変化はどのように感じられましたか。

**高山** 劇場が持っている元々のコネクションがあって、それで難民の人に声をかけてもらったということ、ドイツにはたくさん難民を救済する団体があります。その人たちのところへ

出向いて、誰かを紹介してもらったり、あるいは教会や避難所に行ったりというのを繰り返して集めました。このプロジェクトを通して、クッキングを授業してくれたシリアからきた女性は、授業することによってレシピをFacebookにあげています。その何万人かのフォロワーが彼女のページにいくとシリア料理のレシピが手に入るので、これお金になるのではないかなと思いました。また、さっきの紹介した彼は、優れたマラソンランナーだったのですが、今は仕事として日本食レストランで働いています。それならば、マラソンを教えるワークショップをやったほうがお金になるのではないかと考えて、そういうプロジェクトをやり始めました。しかし、そこで法的な問題がいろいろありました。例えば難民認定されたシリア人は月に200ユーロまでしか稼げないというルールがあります。そのルールを迂回するために、例えば地域通貨や仮想通貨にできないだろうかと模索したのですが、難民の人はそこに関してモチベーションが高くないんですね。お金を仮想通貨でもらっても仕方ないよ、とのってくれなくて、やりたかったのですが頓挫しました。

**肥高** 面白そうですね。でもたしかに暗号資産(仮想通貨)は得体の知らないものだという先入観は強そうですね。

**高山** 彼らのモチベーションがないとこちらもできませんから、止まっちゃいましたね。

**肥高** 「マクドナルドラジオ大学」のプロジェクトもそうですが、基本的に高山さんの作品は「話を聞く」という行為がベースになっていたり、受動的ではなく能動的なスタンスを見出したりするようなものが多いと思います。参加される移民・難民の方とのコミュニケーションで心がけていることはありますか。

**高山** だいたい難民の人にインタビューをすると、難民としての苦労話や移動してきた話を聞くのですが、それは大変だったに決まっているわけですよ。例えばアフガニスタンのカブールから徒歩で半年かかって来た間にタリバンに誘拐されて、友人を拷問で殺された人がいます。彼は命からがら逃げだしてこの国にはもういられないと歩いてきた。そういう人にそういう話をしてもらっても傷を深めるだけです。彼と話したときにアフガニスタンはどういう国なのかとか、故郷はどうだったとか、土地はどんな感じだったのかということ、目を輝かせて答えてくれるのです。だから、難民という彼らに貼られてしまったレッテル・アイデンティティを固定して生きなきゃいけない状態の人に対して、さらに固定してしまうような質問はできるだけ避ける。難民ではないアイデンティティというのは当然あるので、そこにもう一度光を当てる。実は彼らも難民を演じることに疲れているんですね。そういった自分ではない自分を出したい人がこのラジオ大学に参加してくれているところがあって、つまり自分が母国にいたときにやっていたことや、これだったら人に誇れるよというような知恵や知識や才能をいかに引き出せるのかなというのがこのプロジェクトにおけるテーマでした。



**肥高** それぞれのレクチャーのテーマもそういうものを引き出すためのいいキーワードになっていますね。最初の話に紐づけると、舞台上でわかりやすく政治的な内容の作品を観るよりも、むしろマクドナルドのような一見非政治的だと思われるような場所で政治的ななにかを見出していき、嗅ぎつけていくような力が今後必要になってくるのではないかと思いました。

**高山** これは批判されやすいプロジェクトであるということも一つのポイントで、日本だとマクドナルドは愛されている面が多いですが、ドイツの良識派のリベラルな人たち、そして芸術を愛する人たちはほぼマクドナルドを嫌うのですよね。そういうところを難民問題と結びつけることによって、なぜ資本主義と難民問題を結びつけるのかと。でも本当は結びついているのかもしれない。ただみんな蓋をして見ていないだけで、マクドナルドでやると途端にアメリカの企業ですから、アメリカの存在だとかヨーロッパとアメリカの関係だとか、なぜこういうところがセーフティネットになってしまっているのかという社会的な問題が逆に裏側からあぶり出されるようなところがあって。だから僕は矛盾したプロジェクトのほうが、批判はいっぱい受けますが良いと思っています。

**肥高** たしかに矛盾を受け入れるということは、遠回りながらも着実に多様性の理解につながっていくものだと思います。そういう意味で、アメリカが多様性の理解に深くビジネスとしても成功している例が多いというのは結果が物語っているような気がします。

**高山** おっしゃる通りで、だからヨーロッパでやるとマクドナルドは批判される。もう一つ僕がドラマトゥルクでヒップホップを扱ったプロジェクトで、ドイツのオペラ作家のワーグナーから名前をつけた「ワーグナー・プロジェクト」。ヒップホップもアメリカなのでこれも大変な批判を受けました。普通は日本人や難民がどんなプロジェクトをやってもあまり批判されないんですよね。なぜかという、ヨーロッパはある意味寛容の文化、寛容さを持っているので、日本人や難民の人がこういうことやったよというとき、寛容さで受け止められちゃうところがあるんです。寛容さの始まりにはなにがあるのかというと、さきほど肥高さんがおっしゃっていた、多様性が排除につながるということと全く同じ構造があります。最初に他者認定するのですよね、他者だからどうぞ、と。最初に排除してから受け入れるというシステムだと思います。マクドナルドやヒップホップの場合は、そういう寛容さを最初から持ち合わせていないんですよね。マクドナルドであればお金のため、ヒップホップであればヒップホップのためなんです。寛容さがベースになって他者を受け入れているわけではない。多様性が成り立っているわけでもないのです。僕はそのような寛容さというヨーロッパ的なシステムを超えていく、ある種のえげつなさを持った動きとして、マクドナルドに対してもヒップホップに対しても憧れを持ちます。

**肥高** ヨーロッパで見られるという最初に（異なる存在を）排除してから受け入れるという話や、マクドナルドやヒップホップにはその寛容さがないという分析はとても面白いですね。肌

の色や言語、カルチャーが大きく異なる存在ほど、一回頭の中で排除してから受け入れることができるのかもしれませんが。私が最初に少し触れた日韓問題のように、見た目やカルチャーはものすごく似ているのに違うということのわかりあえなさなど、わずかに異なる人ほど寛容になれないことが問題なのだと思います。明確に「他者」と認定し、カテゴライズしたほうが会話もスムーズにいいますが、理解への急げですよね。ドイツのマクドナルドでは、寛容さがベースではない多様性の結果としていくつかの障壁に生じたのかもしれませんが。

**高山** そうですね、ヨーロッパのアメリカに対する距離感ってたぶん微妙なものがあって、日本やアフリカ、中東よりも彼らにとっては近いと感じられるものがあるのではないですかね。そうすると、なかなか他者認定しづらいので複雑な感じになるのでしょうかね。

### 3.「東京修学旅行プロジェクト」

**高山** 次のプロジェクトはもう少し近い、東京に場所を移して、「東京修学旅行プロジェクト」という名前です。代々木上原の「東京ジャーミー」というモスクに行ったとき、僕はそのとき初めて訪ねたのですが、その広報担当の方から、あなたは初めてかもしれないけど、インドネシアから東京に修学旅行に来た中高生はみんなここに来るのですよ、という話をしてくださいました。その時にそうかと、インドネシアの修学旅行生は東京を僕とは全く違う景色で見ているのだと驚きました。逆に彼らがまわっているコースを国ごとリサーチをしてコースを設定して、東京に住んでいる、あるいは東京近辺に住んでいる僕らがそれをなぞるように旅をしたら今まで見ていた東京がだいぶ変わって見えるのではないか、というのがこの「東京修学旅行プロジェクト」です。今まで3回やって、最初に台湾編、その次はタイ編、3回目に中国編をしました。これは東京を別の視点から見直して東京の中にあるアジア、アジア諸国から見た東京を再発見するというプロジェクトです。東京に住む人が、2泊3日のコースをつくってそこに参加して、泊まる人もいれば泊まらない人もいるのですが修学旅行のふりをするみたいな旅です。半分は実際にリサーチした成果を生かして、台湾だったら台湾の中高生が旅をするスポットを訪ねます。もう半分は僕らも独自にリサーチをして、ここもコースにいれたらいいのではないかという訪問地を加えて、半分ドキュメンタリー、半分フィクションをませこぜにした2泊3日のコースをつくるというのが、このプロジェクトの一つのあり方です。最後にこの旅行をした後に、例えばトークやシンポジウムとかおしゃべりの時間や食べたり飲んだりした時間を旅のしおりにまとめ、ドキュメント化します。自分は演劇出身なので、今でも演劇をやっていると思っているから、これがある種の戯曲みたいなものですね。2泊3日の旅行をやってみて、そこで話されたこと、考えたこと、訪れたところ、記念写真、そういうもの全部がドキュメントになって、今度それに参加できなかった人が、今じゃなくて5年後10年後にその戯曲を再演できる。つまり再演可能性もしくは引用可能性、もう一回やり直せる可能性を残しておきたくて、ドキュメントにまとめるという作業

をやっています。これを3回やって気づいたのが、実は国民国家みたいなものをベースにしているのだということです。台湾は人によっては微妙な立場だと考える人もいるかもしれませんが、台湾にしても中国にしてもタイにしても国民国家というものがベースになって修学旅行をつくってきたんですね。そこで、ふと気づいたのが、国民国家というものからこぼれてしまった人たちがいるはずだということです。

[写真] こんなふう場所にごとに記念写真を撮っています。修学旅行といえば記念写真ですから、撮って残す。これは中国編の川口にある芝園団地です。それで、「新・東京修学旅行プロジェクト」というものを立ち上げました。これは国からこぼれてしまった存在である難民の人にフォーカスして、なぜ彼らは難民になってしまったのか考える。例えば戦争、インドシナから日本に難民の方がポートで来ましたが、その背景にも戦争があった。東京も過去に戦争があった街ですよね。だから、難民の人が過去に戦争のあった街である東京を見ると、どんなふうに見えるのかということが「新・東京修学旅行プロジェクト」の一つのテーマになりました。具体的には難民の方を招いて、リサーチとコースづくりと一緒にやります。これはワークショップのようなもので、難民の人たちに修学旅行でまわるならどこをまわりたいか、ここは絶対食べたほうがいい場所や、行くべきところを言ってもらってコースをつくっていく。最終的には難民の方々にガイドをしてもらう、これが2泊3日の「新・東京修学旅行プロジェクト」です。実はこれも3回やっていて、最初がクルド編で、クルドの人はトルコ、シリア、イラク、イランから来ていて、彼らは国を持ちません。国を持たない人たちが国民国家をつくりたいということで、いろいろ動いていますけれども、今のところまだそれが実現していない。その彼ら呼んで、東京の戦争を振り返る、あるいは東京で起きた大震災である関東大震災、東京大空襲というのがテーマでした。そのあと中国満州、中国残留邦人も日本に帰ってきている方がたくさんいらっしゃるのですが、カッコつきの難民化している。そこで中国残留邦人編というのをつくりました。3作目に福島編をつくりました。東京でオリンピックがあるけれども、なにか置いてけぼりを感じている人たちが福島の避難区域にはいらっしゃって、その方たちを招いて修学旅行をする。その主人公は、福島出身の円谷幸吉さんという東京オリンピックの銅メダリスト、メキシコオリンピックの前に首を切って自殺しましたけども、彼が須賀川という町の出身で、もし今の東京オリンピック前夜の東京を彼がガイドするとしたらどんな旅行になるのだろうかというのを福島と東京の中高生たちと探って2泊3日の旅行をしました。これが「東京修学旅行」、そして「新・東京修学旅行プロジェクト」です。

## トーク&質疑応答

**肥高** クルド編、中国編、東京編とありますが、それぞれどのような意図でどこを取り上げたのか教えてください。

**高山** 例えばクルド編ですと、10年来知っている難民の方があります。彼はトルコから日本に来ているのですが、トルコ系クルド人が難民認定を受けるというのは政治の兼ね合いで一

人もいないんですね。でも彼はもう10年以上日本に住んでいる。だいたいこうした人たちはクルドにいるときに遊牧民だったんですね。羊と一緒に移動して、石で仮設の家を建てて、また次の家へ移動するという生活で、石に対しての知見が僕らとくらべものにならないくらい高いです。彼は土木業、つまり解体業に携わっていて、解体すると地面を掘り起こす、そうするといろいろな石がでてくるのだと話してくださいました。浅草あたりを掘り起こすと焼けただれた石がいっぱい出てくる、これは普通の石ではなくたぶんお墓の石だろうと、僕らにはわからないものが彼だとわかるのです。だから、彼に浅草ツアーをやってもらいました。表面はスカイツリーが見えたり五重塔が建っていたりするんだけど、実は彼が見ているものはその下に眠っている東京大空襲と関東大震災で崩れ落ちた石だったり焼け落ちてしまった石だったりする、ということを彼の視点で解説してもらおうツアーです。あと、クルド料理ってこんなものですよというのを、クルドのお母さんたちに来てもらってつくって食べたり、ワークショップをやったりしました。

**肥高** なるほど。都市論が盛り上がるなど、都市というだけで東京特有の地場みたいなものが強く働くなかで、そこに高山さんが異なるものを取り込んだり、都市の異なる面を見せようとしたりすることの難しさをすごく感じました。クルド編では、石に触れる体験や石から読み取れる情報量の多さがそれぞれの出自によって違っていることも興味深かったです。参加者に多様性をつくり、協働することで見えてくる風景は、普段とはまったく異なるものなのだと思います。

**高山** 本当にそうで、例えばもうひとつ例をあげるとイラクにハラブジャというクルドの人が住む街があるのですが、ある日突然サリンガスがまかれて6,000人くらいの方が亡くなってしまった。ハラブジャの人たちはそれを「クルドの広島」と名付けています。クルドの人が、あるいはハラブジャから日本に誰か来たときに、広島や長崎をまわるんですね。一つにはハラブジャは虐殺の舞台になっているにも関わらず、我々はそれを記念する碑がないからだとおっしゃっていました。そのハラブジャからゲストをお招きして、東京都慰霊堂という関東大震災と東京大空襲の犠牲者の骨が納められている記念堂でハラブジャについてのレクチャーをしてもらいました。そうするとハラブジャをみんななかなか知らないし、こういうことがあったのかと。東京も実は記念碑や慰霊碑が少ない街なのです。東京都慰霊堂はたまたまありますが、そうすると東京の中で関東大震災、東京大空襲をどういうふうに記憶していけばいいのか、みたいなことを彼の目から見返せるようになる。そこで「ほうせんか」という朝鮮人で関東大震災のときに虐殺された人たちの碑をつくるべきだという運動をされている法人があり、その法人の代表理事の方にも来ていただきまして、彼と会っているるとガイドしてもらいました。そうすることで僕らが見えていない視点がいくらかでもあるのだと僕らは学ぶことができると思います。

**肥高** 記念碑がないというお話がありましたが、教科書上の歴史や街からこぼれ落ちてきたような歴史は、都市論などによって新しい意味で塗り替えられて、だんだんとそれが分厚くな



## トーク&質疑応答

**肥高** ありがとうございます。実は数か月前に「東京ヘテロトピア」の展覧会をMISA SHIN GALLERYで見ました。展覧会会場のQRコードを読み取ると、台湾の詩人の方が藤田嗣治の戦争画で描かれた台湾の兵士になりきって書いた詩を聴くことができます。移動が不自由な昨今ですが、スマホひとつで自分が過ごしていない時間や土地に思いを馳せることができました。

**高山** 肥高さんが体験してくださったのは、「戦争画/ヘテロトピア - 東京国立近代美術館編」という「東京ヘテロトピア」の姉妹編みたいなものです。藤田嗣治が描いた、フィリピンのある島にむささび隊というパラシュート部隊が突撃して、アメリカ兵を切っている戦争画が東京国立近代美術館にあります。そのむささび隊を構成しているのは台湾の原住民なんですね。そしてその絵を原住民出身の作家であるワリス・ノカンさんに日本に来て見てもらい、詩を書いてもらいました。それをワリスさんが中国語で読み、その日本語訳を台湾文学者の下村作次郎さんにやっていただき、藤田嗣治についての作品をつくったりしているアーティストの小沢剛さんに読んでもらいました。それがQRコードをスキャンしてもらうと聞けるんですね。東京国立近代美術館の収蔵室がMISA SHIN GALLERYに移ってきたみたいに、QRコードをスキャンすると音だけ聞くことができます。戦争画が描かれた場所の詩人たちが、その戦争画にまつわる詩を書くというプロジェクトで、今後も「東京ヘテロトピア」とは別に「戦争画/ヘテロトピア」としてやっていけたらいいなと思っています。

**肥高** それぞれの戦争への向き合い方が、詩からにじみ出ている、ストレートではない表現だからこそ伝わってくる思いを感じました。ありがとうございます。

## 5.「長崎ヘテロトピアカレッジ」

**肥高** そして、今進行中なもののもう一つが、長崎でのプロジェクトですね。

**高山** それを最後に簡単に説明して終わりにしたいと思います。これは僕のプロジェクトというよりも、僕も加わせてもっているプロジェクトです。具体的には、僕と同じ東京藝術大学大学院映像研究科の先輩である桂英史さんと進めています。桂さんは長崎出身です。そんな縁もあって、長崎に旅行やプロジェクトで行ったときに、ここはおもしろい街だなと思い、「長崎ヘテロトピアカレッジ」というのをつくろうと準備を始めたところなんです。なぜ長崎なのかというと、さきほどからヘテロトピアという言葉が頻出していますが、ヘテロトピアって訳すと、異在郷、異なる場所、あるいは他者の場所とか、もう一つの訳し方だと混在郷というなにか混ざっている場所を意味します。長崎という場所はまさにヘテロな場所、他者の場所だなと感じたんですね。「東京ヘテロトピア」のときには、東京の中の異なる場所、あるいは東京の中で他者と交じり合っ

り、やがては見えないほど奥の奥の部分に追いやられてしまうのかもしれない。残った言説だけに振り回されているいろんな問題を見失うわけですが、記念碑のようなフィジカルなものやその行方も気にしたいです。高山さんがこのプロジェクトをしおりとして残すということにもつながってくるのでしょうか。

**高山** 僕らがやったのは本当に一つのアクセスというかアプローチだけで、体験する人によって全く違うことを考えたりイメージしたり思ったりすると思うですよ。そのために物があることや考えるためのベースがあることは重要なだと思います。

**質問4** 「東京修学旅行プロジェクト」に参加されている方は日本の方がメインでしょうか。難民や多文化ルーツの方の参加はありましたか。

**高山** 場合によるのですが、日本の方が多いです。クルド編をやるとクルドの人たちって大家族で行動することが多いみたいで、子どもから大人まで親戚関係みんなぞろぞろと参加されていてまぜこぜでした。ただ福島編のときは、福島から高校生をお招きして東京からも高校生に来てもらいました。半分以上のコース・訪問地がクローズドで、スタッフだけが周りにいて、一般のお客さんが入れない部分が多く、本当の修学旅行に近づいた感じでした。

**肥高** 以前東日本大震災で被災された福島のアーティストの方にお話を伺う機会があったのですが、当時現地にいても震災に距離があったといいます。現実とメディアが報じる震災のイメージと乖離していて、現地にいる人しか体験できない感覚との距離をさらに感じました。

**高山** あるでしょうね。その距離感って僕らが考える以上に大きいなと思います。特に地理的な距離は東京オリンピックのあとますます大きくなっているなと思います。せめて精神的には近づけたり、人の身になって考えたり、あるいは自分を突き放してみたりという機会をアートや芸術という場をつくることで回復できたらな、ということが自分のプロジェクトの目標です。

**肥高** 高山さんのプロジェクトは、上空から俯瞰して街を見るようなメタ視点ではなくて、実際に街の中に入り込み、虫のように動いていくようなリアリティがありますよね。

**高山** そうですね、犬みたいな感じかな。下ばかり見て、匂いくんくん嗅いで、ここへきたら右に行けばいいんだみたいな。俯瞰で見えていないので迷子になるともとに戻れなくなって大変なのですが、迷子になることも時には重要なので、これでいいと思っています。

**肥高** 具体的にどのような迷子体験がありましたか。

**高山** 実際、都市で迷子になるのは簡単ですが、迷子になる

ことによってこんな都市だったのかとフレッシュを感じる、今まで見ていたはずなのに違って見えるという体験ってなかなかないと思います。本当はそうあるべきだと思うですよ。街で生活していても、まるで森の中で迷子になってしまったような緊張感、驚きや不安を感じて、街と出会いなおすという体験があったらいいなと思いますけど、なかなかそれが難しい。僕も普段の生活ではそういうことができないので、アートとか演劇とか美術のツールを自分がつくることによって、作品制作の中で意識的に街の中で迷子になるための練習をしているみたいなことが、実は自分にとっての制作だったりします。

**肥高** 高山さんはさきほど犬とおっしゃっていましたが、そういった目線で無自覚に過ごしてしまうと、言い換えると近視眼的な態度になりうるというか、一種の危険性がありますよね。一度はそういった体験をしないと気づけないような問題もたくさんあるのだと思います。

**高山** 僕もそう思います。近づいたり離れたりがうまくできるといいですよ。その練習をアート作品を体験することでしてもらえたらいいなと思います。自分はそういう練習として作品をつくっています。

## 4.「東京ヘテロトピア」

**肥高** 今また、新しく進めてらっしゃるプロジェクトがあるんですよ。

**高山** 実はもうすでにやったプロジェクトなんですけど、相馬千秋さんがディレクターだった2009年から5年間関わらせてもらっていた「フェスティバル/トーキョー」で、2013年にラジオを使って「東京ヘテロトピア」というプロジェクトをやりました。これは東京芸術劇場の受付に行くガイドブックとポータブルラジオがもらえて、これを持って訪問地を訪ねて、書かれている周波数に合わせることで、そこに起きたかもしれない物語を聞くというものです。僕らがその地域でリサーチした結果を作家に投げて、その作家がそこで起こったかもしれない、あるいはこれから起こるかもしれない物語を書きます。それを外国語が母語の人か、作家自身か、ふさわしい朗読者に読んでもらいます。作家は、詩人であり翻訳者である管啓次郎さんにリーダーとして関わってもらい、温又柔さん、木村友祐さん、小野正嗣さん、井鯉こまさんという5人の作家に書いてもらいました。

どういう場所に行くかというと、例えば、「アンコールワット」というカンボジア難民の人がつくったレストランがあります。ここに行くとか小野正嗣さんが書いた小説を店長さんの朗読で聞くことができますし、もちろん中で食事もできます。

[写真] ここはインドシナ難民の人たちを収容していた場所の跡地ですね。品川からバスで15分から20分ほど行くと、とんでもない景色が広がってなにもない場所に出るんですね。こういった場所にベトナム人を中心としたインドシナ難民の人たちは収容されていた。ここは木村友祐さんが小説を書いてくれて、それをベトナム人の方が朗読しています。

[写真] 四ツ谷の上智大学の隣にあるカトリックの教会です。日曜日の12時から13時半くらいまでフィリピンの方用にミサをやるんですよ。だからそのときだけここがフィリピンみたいになる。フィリピンのスイーツなどが食べられるのですが、ここでは温又柔さんが書いた小説をフィリピンの方の朗読で聞くことができます。

[写真] ここは王行徳さんという台湾から亡命した言語学者のお墓の前です。王さんは世界で初めて台湾語辞典をつくった学者さんで、この前に行くと『あなたは知らない』という温又柔さんが書いたテキストが温さん自身の朗読で聞けます。

[写真] ここは神田に留学をしていた周恩来がホームシックになってしまって、懐かしい味を食べに足しげく通ってスープを飲んでいたという「漢陽楼」というレストランです。東京はたくさんの亡命者やアジアからの避難民を受け入れていた街で、神田には当時2万人近い中国からの留学生がいたと言われています。でも今は、いるがあまり浮上してこない。だから「東京ヘテロトピア」という東京の中でのアジアをめぐるアジアツアーに行くことによって、東京が実はアジアからの移民や亡命者を受け入れてきたアジア都市の一つなんだと感じてもらえるようなツアーをつくりました。

[写真] ここは新大久保にある「MOMO」というネパール人のお客さんが多いネパールレストランです。この店長さんはジャーナリストで、ネパールのインターナショナルスクールをつくっていて社会運動もしていらっしゃいます。そういう方のお話を聞くことができるこの場所でも、作家の書いた物語を聞くことができます。

[写真] ここは東京大学の近くにある「新星学寮」というインドネシアからきた留学生を受け入れている寮の居間です。アジアからの留学生を受け入れてきた伝統のある寮です。そこの居間に期間限定で入れてもらって物語を聞くことができます。[写真] ここは駒込にある「東洋文庫」というマルコポーロの初版から第50何冊まで揃っているような研究所です。世界的には有名な研究所なんだけど、東京に住む僕は知らないし、あまり入らないような場所で、ここでは管さんの物語が聞けます。

当時は全部で14か所設置しました。終わってから、ラジオはメンテナンスが大変だということでアプリにしました。現在東京メトロさんとコラボして制作中です。1月か2月にはローンチできるんじゃないかな。場所は30か所くらいまで増えていますし、新しい作家の方にも入ってもらっています。これが「東京ヘテロトピア」です。

ている場所としてアジアの僕らがあまり知らないコミュニティを取り上げましたが、長崎の場合は、街自体が古くはイエズス会が来て布教して隠れキリシタンがいた異教の場所で、仏教と混ざり合った独自のキリスト教が発展しました。あるいは東インド会社が終着地点として長崎に来て、ジャカルタから運んだ香辛料や砂糖と、長崎の陶器や絹織物が貿易の対象としてヨーロッパに運ばれました。江戸時代になると鎖国ですから、出島ができてその中には外国人が住んで、そこへいろいろの蘭学や文化、そして日本中から留学の徒が長崎に集まって、日本の近代化のスタート地点になるような特殊な場所となりました。あそこは藩ではなくある意味特区のような場所で、脱藩者も集まれるし海外からも人が入ってくる、中国文化も入ってきて、いろいろなもの混ざり合いの中で新しいものが生まれて日本中に広がっていった、というのが長崎という場所で、まさに街自体がヘテロトピア。そこに大学をつくらうと動き始めて、アートスクールをつくります。広く亡命者、難民の人を受け入れたいということで、出島ですね。昔あった出島を今によみがえらせる。特区をつくってしまう。大学ですが、基本レジデンスをして半分はオンラインでいいと思っています。つまり長崎に住んでいない人も参加ができるし、教員も教えることができる。できたら無料にしたいので、そのために新たな収益、運営のモデルを開発しなければならない。こういうものが僕は全くできないのですが、桂さんはこういった構想が一番向いている。プロジェクトをベースとした自主学習をメインにします。授業はいらない、プロジェクトをみんなでつくって、そこで難民の人、亡命者の人、あるいは日本人の学生が集まって、教員と一緒にプロジェクトを立ち上げていけば、それが一番の学びになるだろうと。長崎を拠点にしたい理由は、僕はどうもヨーロッパばかりを見ていて、ようやく最近「戦争画/ヘテロトピア」や「東京ヘテロトピア」というものでアジアに向き合うことができるようになりました。それまで、どうしてもヨーロッパのほうが距離的にも仕事の量的にも圧倒的に多かったの、それを変えたいんですね。長崎に行って長崎から海を見ると東シナ海、さらにその先には南シナ海が広がっています。その都市、例えばプサン、台湾、台北、台南、シンガポール、ジャカルタや、東シナ海や南シナ海をベルトのように捉えています。さきほどヨーロッパ・シンクベルトという話がありましたが、あれはバルカンルートでした。でもアジアの場合は長崎から向こうに広がる海の道、ジャカルタくらいまでの海の道上の点、点というのがヘテロトピアカレッジで、たくさん点在しているイメージを描いています。レジデンス施設さえあれば、どこでもプロジェクトを立ち上げるベースができあがる。そこを教員や学生たちが移動しながら、今度プサンでプロジェクトをやるからここをヘテロトピアカレッジにしようとか、点在するポイントがどんどん増えていくような拠点づくりを今やり始めたところです。これを最終的には「アジアシンクベルト」のプロジェクトとしてやっていきたいと、今少しずつ実現に向けて動き出しているところです。

東シナ海、長崎市、台北、香港、南シナ海、一番下にジャカルタがありますが、この海の道を昔は宗教や貿易の品々や思想、人、モノが行き来していました。これをもう一度思い起こして、ここになにかアジア的なもの、日本が侵略したときに南進していったルートですが、そうではない使い方を、僕ら

の世代が僕らなりにアジアの悲劇的な歴史を乗り越えるために。長崎というのは原爆を落とされた場所でもありますから、ある種の平和教育の延長としてなにかできたらいいなということが「長崎ヘテロトピアカレッジ」、それからヘテロトピアカレッジをつなぐ「アジアシンクベルト」のプランになります。あと2、3年は間違いなくかかるかと思いますが、動き始めました。

## トーク&質疑応答

**肥高** これが実現したら様々な問題の解決に結びつくと思います。亡命者や難民の方を歴史的にも広く受け入れてきた長崎で、2022年の今日、もう一度そういった場をつくり、無料でひらいていくのは本当に素晴らしいことですね。一般論として、学校で学べる内容は社会で生きていくには必要だという前提があり、豊かな家庭であっても貧しい家庭であっても、だいたい同等の学費を払って学校に通わなくてははいけません。どうしても教育を受けることができない人が海外にも日本にもたくさんいる中で、高山さんが考える能動的な自主学習の場は重要ですよ。教授はどのような方をお願いするのでしょうか。

**高山** 教授陣はわりと著名なアーティストが多いと思います。プロジェクトを立ち上げて、そこでプラットフォームをつくることのできる優秀なアーティスト。プラットフォームが一回できると、そこを一緒に立ちあげてまわしていったりするの学生ですから、その中でたくさんの学びがあると思います。僕は記憶障害みたいなところがあって、例えば世界史をがんばって一生懸命学ぼうとやればやるほど、パニックになってしまう。徹夜で勉強しても8点とかで、先生もこれは大変だったなど、最後はもう同情していましたけど、そういう人間が授業で人に教えるようになったら覚えられるようになった。受け手にいるとパニックになるけれど、自分で情報を整理して、こうやったら人に伝えられると説明できるようになると、不思議と覚えられますよ。自主学習ってそれに似ています。全然能力を発揮できない人でも、自分でなにかやり始めると、学べるし覚えられますし考えられるし、自分の体が動くようになる。劇的に変わります。そういう場さえあれば、今学校で能力を発揮できない人、不登校の子や難民、亡命者でも、水を得た魚のように動ける人がたくさんいる。だからアートは本当はそういう場であるべきだと思うので、教えることもないし、教わることもないわけだから、プロジェクトを一緒に立ち上げればそれぞれにそれぞれの個性にあったものを学んで、自分の血や肉にしていくだろうと思っています。

**肥高** マクドナルドラジオ大学にも通じますが、周縁とされてきた人たちが主体性を獲得する場を設けるというのは本当に素晴らしいことだと思います。

**質問5** カレッジとして想定している場所はどういう視点で探しているのですか。すでに候補はあるのでしょうか。

**高山** いくつか話をしているところはありますね。例えば、台南とか台北とかシンガポールとか。あと今度韓国の蔚山(ウルサン)というところに新しい美術館ができます、そのオープニング展覧会に参加するので、その人たちにはこういう話があるのでもしよかったらレジデンスをつくってヘテロトピアカレッジをやるの？みたいな話を少しずつしているところです。

**質問6** 「東京修学旅行プロジェクト」では、他者の視点を取り入れることで空間を異化をしていると思います。日本に住む人達は日常的に異化の視点を持ちにくい、異なるものを受け入れづらい、と思うのですが、例えばドイツのような国でもこういった異なる視点での修学旅行は成立すると思われませんか？

**高山** ドイツはどうですかね、やったことないから。実は修学旅行って制度自体少し独特で、日本にはありますがドイツの場合だと遠足みたいな感じのものはあるけれども、がっつりとした修学旅行はどうやらないようです。ただ、グランドツアーといって、イタリアまでゲーテが修学の旅に出た、というのは修学旅行の原型だとも言われていますから、ないことないと思うのですが、外国人の視点を通して修学旅行を見る、新しく社会を見るというのはどうでしょうか。ヨーロッパは、もう少し地盤が固いのではないかと思います。日本はもともと風通しがいいところがあると思うので、ヨーロッパではなかなか僕や外国人、難民の人が風穴を開けようと思っても難しいのではないかと直感で思います。

**肥高** たしかに日本は意外と柔軟な部分がありますね。その状況になじんでいくのが早いとも言えるでしょう。まもなくレクチャーが終わりの時間に近づいてきましたが、マクドナルドラジオ大学の際に高山さんがおっしゃっていたように、このレクチャーに参加されている方は皆さん問題意識の高い方だと思います。その自分自身をいかに疑い続けられるか、そして劇場の外で出会う、いつもと異なる風景や非日常的な要素にいかに敏感になれるかが、今後多文化共生の鍵になっていくのだと高山さんのプロジェクトを通じて気づくことができました。本日はありがとうございました。

**高山** 聞いてくださっていた皆様ありがとうございました。



vol.2

2022年1月25日(火) 18:30-21:00

## トーク&パフォーマンス「東京に住む外国人の声と影」

東京影絵クラブ 宮本武典 (キュレーター) + 川村巨平齋 (影絵師・音楽家)

前半は宮本武典氏によるレクチャーを、後半は影絵パフォーマンスを実施した。

### 宮本武典氏 レクチャー

#### 0. イントロダクション

宮本 皆さんこんばんは、宮本武典と申します。

僕はキュレーターという肩書で仕事をしています。山形に養蜂家であり蜜蝋のキャンドルもつくっている安藤竜二さんという方がいらっしゃるのですが、アーティストやキュレーターの仕事もこれに似ていると思っています。その土地に咲いている花の蜜を、虫や蜂を介して集め凝縮して新しいものにつくり替える。それぞれの土地で違う木々や花があり、集まる蜜の色や香りや味が違っているように、その土地や季節によって生み出される体験や与えられるものは変わっていきます。東京影絵は、東京という都市の中で集まった声や体験を凝縮しキャンドルに火を灯すような気持ちでつくっています。実は、これは東京から始まったものではなく、長らく僕たちがベースにしていた



東北の地から始まっています。本日は、東京影絵の話の前に、震災と影絵の話から始めていきたいと思います。

#### 1. その土地との関わりの中で生まれるアートプロジェクト

僕は奈良県奈良市で育ち、家の近所に東大寺があります。夏には大文字焼きがあり、冬の「春日若宮おん祭」では大きな神明を振り回すなど、火の祭りが多い地域です。皆さんはそれぞれ幼少期にさまざまな芸術体験をされたと思いますが、僕は美術館のピカソを見たりするよりも、仏像を見たり、祭りに触れたりすることが多かったです。今、学生たちに美術を教えているのですが、現代アートにはさまざまな表現がありますし、社会にはさまざまなアートのアプローチがありますが、年を追うごとに、自分のつくるもの・追い求めるものは、自分が生まれ育った町や地域での原体験に戻っていったような気がします。

##### ● 肘折温泉「ひじおりの灯」

今ご覧いただいているのは肘折温泉という山形の小さな湯治場です [写真]。12年程前からここで灯籠のプロジェクトを

宮本武典 (みやもと・たけのり) (撮影: Kohei Shikama)

キュレーター。東京藝術大学准教授。海外子女教育振興財団の派遣プログラムでバンコク赴任、武蔵野美術大学バリ賞受賞により渡仏、原美術館学芸部を経て2005年に東北芸術工科大学へ。2019年3月まで同大学教授・主任学芸員を務め、東北各地でアートプロジェクトや東日本大震災の復興支援事業を展開。2014年に『山形ビエンナーレ』を創設しプログラムディレクションを3期にわたって手がける(2018年)。2019年に角川武蔵野ミュージアム(隈研吾氏設計)開館事業にクリエイティブディレクターとして参加。2022年に東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻准教授に着任。

施しています。学生たちとつくっているプロジェクトで、湯治場に何日も泊まり、その街の人たちから話を聞き、それを絵にして、灯籠に仕立て、街に灯すというプロジェクトです。山奥の湯治場で、ささやかな光でいろいろなことを語ることができます。地域の人たちは、アートなんてよくわからないけれど、これはわからないことはないとおっしゃいます。自分たちの歴史や文化や家族の物語が描かれていて、この地域の子どもたちは毎年当たり前のようにこの風景を見て育っている。ここは、カルデラ盆地の街なのですが、八角形の灯籠の中にカルデラの中の湯の町の記憶や歴史がそのまま残っているようにも感じられます。世界的に活躍されているアーティストの方とお仕事をする機会はあるのですが、このような仕事で得られる感動は格別なもので、誰のための表現なのかアートなのか、関わる学生も深く学びますし、僕にとっても原点のひとつです。[写真] このナマズの灯籠は、震災で家が流されてしまい、頼るところがなくなった学生が肘折温泉の旅館に半年間住まわせてもらった感謝として描いたものです。地震の象徴であるナマズに、カジガガエルに扮した温泉街の人々が乗っかって「まあまあ、あなたそんなに荒ぶらないで温泉でも浸かっていきなさいよ」と迎えています。描いた本人は、現在はアーティストとして活動していませんが、この集落の人たちにとっては大切なアート作品となっています。

#### 2. 影絵師・音楽家 川村巨平齋氏との共同

##### ● 影絵芝居『ヘビワヘビワ～南相馬市小高区大悲山の大蛇伝より～』

震災を経験し、その土地の人たちのためにどんな表現が可能なのかということは、非常に切実でした。原発事故のあった場所から15キロほど離れた福島県南相馬市では、夏休みに避難せず南相馬に残ることになった家族の子どもたちが、学校は閉まるが両親は働いている、エアコンをつけると外気や放射能が入ってきてしまい野外活動が制限されるということがあり、全国各地の支援団体のもとで夏休みを過ごすというマッチングのNPO「南相馬こどものつばさ」というNPOを地域の人たちや先生方と立ち上げました。

当時、僕が勤務していた山形にある大学が受け皿のひとつになり「キッズアートキャンプ山形」というプログラムを6年間実施しました。参加条件として子どもだけではなく家族単位で参加してくださいというものがああり、夏休みの大学のキャンパスに家族を招いているいろいろな体験を提供しました。最初は農業体験や染物体験、陶芸などのアクティビティを実施しまし

川村巨平齋 (かわむら・こうへいさい) (撮影: 小暮哲也)

影絵師、ミュージシャン。インドネシア共和国・バリ島にのべ2年間滞在し、影絵人形芝居「ワヤン・クリット」と伝統打楽器「ガムラン」を学ぶ。アジアを中心に世界各国で影絵と音楽のパフォーマンスを発表。また、日本各地でフィールドワークやワークショップを通じて、土地に残る物語を影絵作品として再生させる活動に取り組む。ガムランを使った音楽ユニット「滞空時間」主宰。第27回五島記念文化賞美術新人賞受賞(2016)。

た。その過程で参加者に話を聞くと、南相馬の人たちの中でも学校が統合されているが中々交流がなかったり、補助金が出る地域と出ない地域があったり、僕らからみるとみんな同じ南相馬の人たちですが、その中でもけっこうバラバラな状態でした。そこで、参加した人たちがみんなでひとつのものをつくる時間を過ごせないかと、2泊3日のプログラムを考えました。ここに、影絵師の川村巨平齋さんに参加していただきました。川村さんは、ガムランだけではなく、ワヤン・クリットという伝統的な影絵も操る方です。また、伝統的なこともされますが、最近はコンテンポラリーな領域でも活躍されています。川村さんの活動を、僕がディレクターをやっていた山形ビエンナーレという芸術祭で拝見する機会があり、ぜひ協力してもらえないかと声をかけ、大きな影絵を全員参加でつくるという構想だけを持って南相馬に一緒に来ていただきました。当時は、まだ放射線も高い状況で、帰宅してはダメ、住んではダメ、入り込むのも許可が必要というセンシティブな状況だったのですが、実際に行ってみると、その土地に残って活動している方がいらして、その方から南相馬の小高で「大悲山の大蛇」という伝説があるという話を聞きました。盲目の琵琶法師の音色に聞きほれていた大蛇がいついつに大雨を降らすという、日本のいろいろな場所にある蛇と琵琶法師と大雨にまつわる民話です。それをもとに『ヘビワヘビワ～南相馬市小高区大悲山の大蛇伝～』という参加型の演劇をつくりました。作品にするにあたり、普通に民話を演じるというのではなく少し工夫をしました。参加するご家族にご先祖は何をしていたのか調べてきてくださいという宿題を出し、それぞれのご先祖の影絵人形をつくり演じました。あるお母さんは仮設住宅で亡くなったご自身の父親とお孫さんを影絵の中で一緒に出したい

撮影: 小暮哲也



ということで、お父様が南相馬特産のメロンを持って出てきます。旅の琵琶法師がやってくると、入れ代わり立ち代わりいるいるな住民がやってきて丁々発止やり合います。深刻な話ではなく笑いができるような村芝居です。お父さんやお母さんたちが蛇のウロコをつくりそれをつなげて蛇の役を、子どもたちはそれを退治する村人の役をやったりして、大人と子どもが協力して物語を演じていきます。そこで語られていることは、津波とか原発事故と重なってくるわけです。自然とどう向き合うか、災害のときに、どういうふうに人々は協力しあっているのか。そういうようなことが直接的ではないですが、みんなで考えながら、ひとつの劇をつくっていきました。

＊ヘビウヘビウで琵琶法師を演じたサル「ニシオカさん」が登場。

川村恒平斎さんの作品の中に出てくるサル「ニシオカさん」は、カッパさんもよく出てくるのですが、川村さんの定番のキャラクターです。パリのハヌマーンのようにも見えますが、色々狂言まわしのように入ってきて笑いをとってみんなを引き込んでいきます。この物語は深刻そうなテーマに思えるのですが、そうではなく、みんなで楽しく笑いながら、時にはちょっと泣きながらつくっていくというような、今思い出してもぐっとくる3日間でした。

このプログラムはそのあと同じ演目同じメンバーで、福島や山形で4回公演しています。だから、これ自体が小さな劇団みたいになって子どもたちも大きくなっていきますし非常に思い出深い作品です。

### ●NPO法人バーンロムサイ『おそなえ きのみ』

南相馬のプロジェクトは川村さんとの共同の一作目だったのですが、その他にもいろいろなコラボレーションをやってきます。絵本にもなった『おそなえ きのみ』という作品です。タイのチェンマイにあるバーンロムサイというNPO法人が運営している、HIVに感染したお母さんから生まれた孤児たちが集まって暮らしている孤児院から依頼を受けて、僕と川村さんで一週間くらい子どもたちと一緒に過ごして作品を作りました。子どもたちは、最初はスクリーンのあっち側で見ているのですが、だんだん僕もやりたい私もやりたいと、裏側に回ってきてみんなで影絵をつくって遊んでいました。『おそなえ きのみ』という絵本のストーリーになるように事前に僕と先生たちとでプログラムをつくって、子どもたちが影絵を通して不思議な体験をする様子が一冊の絵本になるという作品でした。川村さんがバーンロムサイの施設に行き、子どもたちの日常に触れるストーリーのベースになるものはないかと話を聞いていたら、用務員さんから、施設の庭にあるガジュマルの木の上に、ここで亡くなった子どもたちの白い魂がずっといて、それが時々見えるという話を聞きました。それを聞いた川村さんが、これをテーマに絵本にしよう。影の中でガジュマルの花が咲いて、現実の子どもたちとその施設で亡くなった子どもたちが出入り入ったりして、観客がいない中で上演した作品でした。時間とか生きてるとか死んでいるというのを超えて一緒に混ざっていくというような不思議な光と影の時間、境界の時間、影絵の不思議の中にあるという感覚でした。他にもたくさんいろいろなプロジェクトを仲間たちとやって

いるのですけれども、今日は南相馬、チェンマイでつくったプロジェクトについて東京に入る前にお話しさせていただきました。

冒頭にご紹介した安藤竜二さんは、自分がつくった蜜蝋キャンドルを灯して絵本の読み聞かせの会をやっています。絵本作家の荒井良二さんのキャンドルをテーマにした絵本が定番で、荒井さんも安藤さんもお二人とも山形出身なのでお互いにとっても尊敬しあっています。絵本をつくることと、森でハチミツを集めてロウソクを灯すことは同じことだと、二人はソウルメイトのように言っています。

影絵も読み聞かせだなと思いました。僕も、自分が小さい子を山形で育てていく中で、震災にもあい、もちろんクールでかっこいいアートも大好きですけど、家族の時間の中に自分の専門性を混ぜ込みながら一緒に子どもたちと何か体験ができないかなという中で、影絵というのは原始的な映画でもあるし巨大な絵本でもあるし、語り手が心の中のイメージを伝えていくという読み聞かせなのだと思います。何を聞かせるのが重要ですが。

## 3. 東京影絵クラブ

### ●東京でのプロジェクトはどう立ち上がったのか

チェンマイの小さな孤児院や南相馬とは違い、約1,400万人が住んでいる東京では、どういうふうに影絵の作品をつくったらいいのかと、川村さんと東京駅で頭を悩ませながら打合せをしました。いくつかの作品をつくる機会を得たのですが、巨大な東京で誰と誰の物語を集めて伝えるか、いろいろなモチーフがあると考えたとき、ふたりで一致したのは、一番話を聞きたい人、自分たちがわからないこと、知りたいことにしようということでした。この15年で外国籍の人が増えたよね、コンビニやマクドナルドなどで日常的に見るけれどほとんど言葉を交わしたことがないよね、と。川村さんはパリに2年、僕はタイのバンコクに4年暮らしていたので、アジアの若者たちがどんな思いで東京で生きて東京を見ているのか。コロナの前の企画だったのでオリンピックで東京が浮かれまくっているときに、違法労働やいろいろな悲しい事件もありました。そんな中、恥ずかしい話、今回このような場に呼ばれるようなこの種のテーマに詳しくなく、専門家でもなく、この場にいらっしゃる方のほうが詳しいかもしれないですが、僕たちはすごく興味があった。ただどう関わっていけばよいかわからなかったので、影絵という自分たちの持っているアートというものをひとつ回路にしてそこで学んでいきたい、あなたの話を聞かせてほしい、というプロジェクトになっていきました。

特別なNPOとかに頼らなくても、知り合いの知り合いにつながっていくだけでも、19か国60人の方と簡単につながれました。皆さんもそうだと思います。その気になればつながれます。たくさん東京に住んでいる外国籍の人たちが日本人の友達が欲しいがっているし、日本語で話したがっているし、自分のストーリーを語りたがっているということがよくわかりました。川村さんは、取材先で出会った一人ひとりの顔を影絵にしていって、最初はまだどんなものになるのかイメージはなくて、おそらくアンソロジーのようなものになるだろうと考えていま



した。このプロジェクトに興味を持ってくれたNHKのディレクターの方が「わたしたちが彼らを取り上げる時は何か事件があったときか、何か法律の改正だとかそういうときにしか話を聞かないけれど、本当に普通のありのままの彼らは何を思っているのか、ということはジャーナリズムのスキームでは話を聞けないし取り上げる機会もない。だからあなたたちの仕事は非常におもしろい、その中から聞くべき声が拾えるかもしれないね」という励ましをいただいて、やっていくうちにどんどん増えて60人くらいでコロナが激しくなったので、プロジェクトとしては書籍にまとめることにしました。「東京影絵」という本です。

影絵の公演をする前に、まずテキストをアンソロジーとして台本のようなものにまとめようと思ったのですが、結局写真絵本のようなものになりました。一貫したストーリーはなくて、様々な人たちが自分の東京ストーリーを語ってくれています。最初は僕らと縁が深い東南アジアの若い人たちから話を聞いていたのですが、そのうち東南アジアとかヨーロッパとか区別するのはおかしくないか?となって、あらゆる肌の色の人たち、言語の人たちまで広げて、いろいろな方の影と、顔を映していいという人についてはポートレートも撮らせてもらって、言葉も集めさせていただいたという本です。コロナで中断してしまって、僕らとしてはこれからもまだまだ長い旅になるのだらうと思っているのですが、ここまでをひとつのドキュメンタリーとして、そのトレーラーになるような映像を作りました。ギャラリーに来てもらって、影絵人形を用意して、セッティングして。はいどうぞとなったら、影として映ることで、対面ではしゃべってくれなかったことをいろいろしゃべってくれました。それは僕らに向けてしゃべっているというより、影になっている自分に向かって語っているような、不思議な時間でした。

本当はこの60人に来てもらって大きな影絵の公演をやりたい。次々にみんなが出てきて僕はこう、私はこうってことをしゃべってもらいたかったのですがコロナでできなかったのが本だけ先に出しました。東京の銀座にある森岡書店という小さなギャラリーで出版記念展をやりました。コロナ禍で人が全然来ないので、Instagramでライブ配信をして毎晩この本の中で語られている人々の言葉を朗読家の方に読んでもらったり、取材を受けた当事者の外国籍の人たちにも来てもらったりして、毎晩入れ代わり立ち代わりでそれぞれのストーリーを語ってもらいました。11月17日から28日まで十二夜連続でやりました。今回の場もこのインスタライブを見てくださった方がぜひ何か一緒にやりませんかということで、小さな

場所でやったことですが、届く人には届くのだなと嬉しかったです。今日は第十三夜という設定でそれからもう1年たってしまいましたが、後半の60分では、コロナ禍がさらに続いた時間軸の中で選びなおしたストーリーをお伝えしていきたいなと思います。

### ●東京に住む外国籍の人々～十二夜の「東京影絵を読む・聴く・語る」を通して

その前にもう少しご説明すると、第一夜「ムスリムの東京今昔」という朗読の回でした。皆さんに、家族の話や仕事の悩みを相談できるムスリムの友人はいますか?今回取材に応じてくれた中には、アフリカ系やアジア系など、いろいろなムスリムの方がいらっしゃいました。[写真]左側の方はムハレムさんというトルコの方です。トルコの方やイランの方は、長く東京に暮らしているムスリムの代表格だと思いますが、彼が言うには最近の東京のモスク・ジャーミイなどに行くとアジア系の方がすごく増えて、同じイスラム教を信仰しているけれど、文化的には非常に多様な人たちが集まるコミュニティになっている。そういう多言語・多文化の中で、東京のモスクで新しいジェネレーションが生まれてきていると言っていました。僕らの知らないところで東京のモスクやムスリムを取り巻く環境も大きく変わっているし、マレーシアやインドネシアからも、アジア系の人たちが東京にやってきて働くようになって、学生のころほとんどアジア系のムスリムの人たちを見かけなかったと思うのですが、食材がハラールフードであるとか、非常に手に入りやすくなってきているのは、アジア系の人たちがたくさん移ってきたのが大きいとおっしゃっていました。対して、アドリアンさんという右側にうっすら影だけ映っている青年がいるのですが、彼はインドネシアの宗教が耐えられなくて、逃げるように東京にやってきました。彼は同性愛者なのですが、自分のルーツであるムスリムの文化はそれを認めておらず、そこで生きることができないので東京にやってきたということでした。ムスリムの出自を持ちながら、様々な東京での生き方やコミュニティのあり方があるのだと知りました。それぞれの中でも、ものすごく多様であると言えます。

第二夜は、『トーキョー・チャイニーズ』。近くてすごく遠い、遠くてすごく近い、インタビューする中で抜群に中国の方のインタビューがおもしろかったです。深く日本の社会のことを見ているし、包み隠さず率直に言ってくださるので、話を聞いていておもしろいです。例えば、中国の若者がなぜ日本に来るのかということ聞いてみても、様々な学び・発見がありました。[写真]一番左のカ・ケツさんという女性は、日本人女



性があまりにも化粧がうますぎて、東京はおしゃれすぎて町に出ることが苦痛。中国では化粧をしている人もいるけど、ほとんどしない。最初はみんな頑張っているけどだんだんやらなくなると。これはカ・ケツさんだけかなと思ったのですが、私が教えている東京藝大でも中国からの留学生がいて、やっぱり化粧の話が出ました。電車に乗っても美容整形や脱毛の広告、日本の求めている美のかたちに取り囲まれて生きていて、そういった文化をスルーできない人たちにとっては、すごく苦痛なバイアスがかかっている、特に若い女性には顕著だということがわかりました。

一方で [写真] この一番右にいるワンさんは銀行にお勤めの中国の女性なのですが、めちゃくちゃ東京をエンジョイしています。インスタグラムに写真をあげ、スイーツを食べまくり、今アフタヌーンティーにはまっています、みたいな女の子です。でも、銀座コリドー街を歩いていたときにいきなりナンパされたり、風俗の勧誘のトラックが街中で走っているのを見てびっくりしたり、楽しみながらも「ん？」と思うことが多いと言っていました。東京は直すところもないし変わる必要もない、到達していますとおっしゃっていました。東京にないことと言えば「スキーができないこと」という中国の若者もいます。真ん中の神谷さんは日本に帰化した中国人の女性で、彼女は両親の自分への依存から逃れたくて、中国のすべてを捨てて日本で生きていくことを決意し、東京にきました。神谷という名前も、日本の好きなアニメのキャラクターからとったということで、新しい人格を生きようとしています。インタビューのとき、ボーイフレンドと来てその後結婚したのですが、そのボーイフレンドの方は中国人だと全く気づかなくて、付き合っただけでばらばらって初めて聞かされて知ったということでした。

第四夜『家族の風景』。東京で外国籍でありながら家族をつくっていくことの喜びと苦しみを語ってくれた人もいました。[写真] 右のイギリス人のデブさんは日本にきて18年、本当は今日出演の予定だったのですが、濃厚接触者ということで今日は来ることができなくなってしまいました。彼は日本人の女性と結婚して吉祥寺に家を建てたのですが、外国人なのでローンを借りることはできなくて奥さんが世帯主という形で建てました。子どもがなかなかできなくて苦しんだのですが、最近生まれたということで、今日は家で赤ちゃんの世話をしなさいと伝えましたので、家で世話していると思います。[写真] 右のレトノさんはインドネシアの料理人で、インドネシア料理店を旦那さんとされているのですが、彼女の悩みはインドネシア料理を日本で育った自分の子どもが食べてくれないこと、レトノさんが料理をつくっても、勝手に自分で日本の食材で料理をつくってよそで食べている。もう苦しい悲しい、なんで？って。そういう話はニュースなどで情報として見聞きするけれども、実際に話を聞くとまた受け止め方も変わってくるのだと思います。

それから『ひとり／ひとり』というキーワードでの朗読の回もやりました。さっきアドリアンさんの話でも出たのですが、例えば自分の母国の宗教のコミュニティがしんどい、あるいは大家族中心の暮らしがしんどい、そこでさらされる熾烈な競争がしんどい、人種差別がしんどい、それぞれの国の事情の中で、あるコミュニティやカテゴリーされることの苦しみから逃れたくて日本にやってくる若者たちがけっこう多いというこ

とがわかりました。

[写真] 左上の韓国人のコ・ソンギョンさんは、韓国はなんでも食べるものの量が多くて、たくさんの人で食べることが前提になっていて、日本に来てようやく一人分の料理が出てきて私はすごく安心しましたと。アパートの部屋も店の構造もそうだが、東京は一人で生きていくために設計されていて、私にとって居心地がいいと言っていました。

[写真] 左下のローリンさんは、フィリピン系の黒人アメリカ人です。アイデンティティは非常に複雑なのですが、彼は外見的には黒人なので、インタビュー時はBLMが激しかった時期ですから、黒人というアイデンティティのままアメリカで生きていくということは苦しいし怖い、だから軍人をしているお父さんには申し訳ないけれど、僕はアメリカに帰るつもりはない、日本で生きていくと。どうやったらアメリカに帰らずに生きていけるのかということに必死に探っています。

[写真] 右の二人はシャネットさんとMさん。Mさんは大使館に勤務されている方なのでイニシャルでお願いしますということでしたが、二人はスウェーデンとノルウェーの方です。北欧のパーソナルスペースは日本人と似ていて非常に居心地がいい、コロナでさらに人と会わなくてもよくてめちゃくちゃ居心地がいいと、母国に帰ると親が年老いていて私一人でどう世話したらいいかとか、いろいろと背負わなければいけないから、もうちょっと東京で自分の好きなことを打ち込みたいと、話を聞いていると日本の若者の言っていることと同じです。そんなふうに一人でもっとも生きていきやすい。孤独にもなりやすいけどほっとしてくれる。そういう街である。そのことの魅力が世界のさまざまな若者の話を聞いていると見えてきて、非常に興味深いことでした。

その中の一人、ローリンさんに、インタビューから1年後に再会しました。コロナがあって当然アメリカにも帰れない、日本に残りたいと言っていたけどどうしていたのかインタビュー時の映像があるので、お見せしたいと思います。これは川村さんがいつも音楽をつけているのですが、彼がこだわっているアフリカのルーツに対するリスペクトで、ヒップホップ系というカラップっぽい音楽になっています。

=映像=

基地の話だったり、フィリピンとアフリカのコミュニティの違いだったり、彼にはフィリピンのルーツもあるけれど、フィリピンのコミュニティにはタガログ語がしゃべれないから入れないとか、一人の人間の中にも様々なルーツがあり、自由に行き来できるようなものでもないということがわかりましたが、1年前に会ったときよりも自分の黒人としてのアイデンティティに対する目覚めが強くなっているようでした。

この映像を2021年7月に東京ビエンナーレという国際芸術祭で発表しました。コロナ禍で廃業に追い込まれたビルのテナントの一室に映像を投写したのですが、その中に人を入れることはできないから窓ガラスにみんなの言葉をたくさん貼り出してその奥に映像を流していて、僕たちの距離感、境界、まさにディスタンスだと思うのですが、それを表現したプログラムでした。そして今日を迎えています。

## 4. パフォーマンス／第十三夜『東京ディスタンス』

東京という街をひとつの物語として語ることは本当に難しいことだと思います。さきほどの南相馬の民話の中から浮かび上がってくる土地の姿とは違い、それぞれにとっての東京、自分と東京というようなストーリーの集積から、もしかすると東京の未来というか、これからそうなるのだろうかというひとつの流れのようなものが見えてくるのではなかと今は考えています。

## REVIEW

### 東京に住む外国人の声と影

楊淳婷（ヤン チュンティン/リサーチャー）

白夜のように灯る池袋駅。真横の劇場でガタンゴトン、ガタンゴトンとトンネルを潜り抜ける電車が走っていた。ガムランの幽玄な音色が響き渡る暗闇から浮かび上がる優しい光は次々と人影を映し出し、四方には複数の横顔が幾重にも重なっていった。無重力の影は息を吹き込まれたかのように「東京」という巨大都市について語り出した。耳を傾けてみると、個々の私的な語りは「東京」という難解な構造体のぼやけたアウトラインを描き出そうとする小さなかけらのようなものだ気がつく。やがて周りは暗がりとしずけさに返り、乗客は両脇に座る誰かの気配を感じながら、語り残された数々の言葉の余韻に浸るばかりだった。

2022年1月、新型コロナまん延防止等重点措置が適用されたなか、対策を講じつつ東京芸術劇場の一室に実際に観客が集まり、トーク及びワヤン・クリット (Wayang Kulit) と呼ばれるインドネシアの伝統的な影絵芝居を基にしたパフォーマンスが行われた。影絵師の川村亘平斎によると、「ワヤン※」とは単に「影絵」をさす言葉ではなく、「現実と非現実を飛び越える」、あるいは「現実と非現実の間」という意味合いを含む言葉である。物理的な空間制限を越えてシルエットとして登場した「出演者」は、日本で暮らす出自がさまざまな外国籍住民である。

キュレーターの宮本武典が川村と取り組んできた「東京影絵」は、外国籍の人々の東京をめぐるオーラルヒストリーを影絵に置き換えて表現し、急速に変貌する2020年前後の東京を多様な視点から照射するアートプロジェクトである。コロナ禍の影響で予定していた実演が中止したり、形を変えての上演となったりしたが、19カ国・60人の言葉が写真集『東京影絵』に綴られ、今回のパフォーマンスのベーシックエッセンスとなった。

本日、第十三夜の朗読の回のテーマは、『東京ディスタンス』と設定しました。もはや外国籍であるとか、東京生まれ東京育ちとか関係なく、2022年1月の東京に生きている一人ひとりの東京を影絵にできたらと思っていて、皆さんに記入用紙をお配りしました。ぜひあなたにとっての東京は、というのを言葉で寄せていただきたいです。できれば読みやすい言葉で、全員の東京を、朗読の岡安さんに読んでもらおうと思っていますので、今日の朗読に皆さんの東京を提供してください。レクチャーはここで終わりにします。ご清聴ありがとうございます。

「東京影絵」にたどりつくまで、宮本と川村は南相馬市やタイのチェンマイで地域の物語や噂話を共同制作で影絵芝居にしてきたが、東京というスケールの大きい都市については「どこから語ればいだろうか」と自問したそう。一方で五輪開催の共生都市を目指した東京における外国籍住民の増加は顕在的な社会現象となっていた。約1400万人の人口が密集する巨大都市・東京を複眼的に捉える術として、そして、東京のまだ十分に知られていない一面に光をあてる試みとして外国籍住民の語りがかき集められた。

宗教的イデオロギーや人種的アイデンティティといった複雑な思いから、単純に一人暮らしが楽しいというライフスタイルの好みまで、理由はともあれ東京は移住先の一選択肢としてグローバルの人々を惹きつける側面があるようだ。そうした語りの集積から、東京が「一人でもっとも生きていきやすい」まちとして認識されており、海外の人々をはじめ日本各地の若者も引き寄せている状況があることが露わになった。

物語の朗読や即興的な音楽パフォーマンスにつれて自在にシルエットを変化させ、時には観客を包み込むように空間の隅々へと広がる幻想的な影絵は、生身の人間との会話的経験でもなければ、写実性を求めるドキュメンタリー映像でもない。光と影がもたらす原始的な身体感覚は我々の想像力を刺激してやまない。巨大都市・東京の実像、そこに住む外国籍住民一人ひとりの姿、東京の人々が迎える近未来の模様…。日常とは異質な心象風景はもう一つのリアルとして、現実を彷彿とさせる出会いの体験をもたらす、影絵がつなぎ止めている現在のオルタナティブを予見させてくれるのではないだろうか。

※ ワヤンは「インドネシア語で影を意味し、主としてジャワ島の影絵芝居ワヤン・クリをさす。」（『日本大百科全書』小学館、2001年4月）



## vol.3

2022年3月19日(土) 15:00-17:00

トーク&amp;パフォーマンス(ワークインプログレス)

## 「海外にルーツを持つアーティストと多文化共生」

y/n(橋本清+山崎健太)、

モデレーター:若林朋子(プロジェクト・コーディネーター)

会場:東京芸術劇場シンフォニースペース(5階)

**橋本** こんにちは。y/nの橋本清と言います。本日はご来場いただきまして、誠にありがとうございます。今日は公開レクチャーシリーズVol.3「アーティストの視点から多文化社会を捉える」で、パフォーマンスとトークを行います。まずはパフォーマンスをお見せしますが、これはワークインプログレスとって、今まさに作っている、そしてこれから1年くらいかけて作っていく“途中経過”をお見せする形になります。今回、海外にルーツを持つアーティストの多文化共生ということで声をかけていただき、自分のルーツや多文化共生についての作品を作ることになりました。といっても、僕たちy/nはこれまで多文化共生に関する作品を作ってきたわけではありません。これまで作ってきた3つの作品はそれぞれ、「男性同性愛者のカミングアウト」「セックスワーク」、そして「日本における手品の歴史」を扱ったものでした。ですから、今回僕がトーク&パフォーマンスを依頼されて今ここにいるのは、多文化共生の専門家だからではなく、僕がブラジル国籍だから、ということになります。みなさんは、ブラジルにどんなイメージがありますか？

パフォーマンスはこのような問いかけからはじまった。およそ30分のワークインプログレス(制作途中の作品)の上演のあと、モデレーターに若林朋子を迎えてのトークでは、今回の企画の成り立ちから「多文化共生」についてそれぞれが思うこと、そして2023年に予定されている本公演の話まで、観客

との質疑応答も交えながら様々な話題が展開した。以下ではトークの内容を採録する。

## 1. 作品づくりの過程、作品の内容について

**若林** まずは、今回の企画のお話があったとき、y/nのお二人はどのように受け取られたのでしょうか。

**橋本** 今回の企画は、東京芸術劇場で人材育成担当をされている田室寿見子さんから話をいただきました。2022年度から劇場で「多文化共生」をテーマにした活動をするので、「海外にルーツを持つアーティスト」の協力を得たい、という内容のオファーでした。もともと田室さんとは、『セックス/ワーク/アート』という2021年2月に発表したy/nの作品を観に来ていただいたことがきっかけで、僕の「ルーツ」について少しだけですがお話をする機会があったんです。というのも『セックス/ワーク/アート』では、僕がブラジル国籍を持っていることに言及する場面もあって、その場面を前提に田室さんから家族や僕自身のことについていろいろと質問を受けました。なので、僕が「ブラジル国籍で海外にルーツを持つ当事者」だからこそ声がかかったんだと、そう理解しています。ただ、田室さんからはy/nが『セックス/ワーク/アート』でおこなった構成や演出面のことについての感想もしっかりともらえたので、

自分は「アーティスト」としてオファーが来たんだ、という実感を同時に持つことができました。もし、当事者だから、という理由だけだったら、正直しんどかったらと思うます。

**若林** 山崎さんはいかがでしょうか？

**山崎** 最初に橋本君がブラジル国籍であることが理由でオファーが来たとき聞いたときは率直に言ってむかつきました。そのあと、y/nのこういうところが面白いと思ってオファーしましたときちゃんと説明していただいたので納得したんですけど、最初に感じたむかつきはパフォーマンスにも組み込んでやろうと思ってクリエイションを始めました。

**若林** そういう話も伺えるのがワークインプログレスの良いところだと思います。僭越ながら私の感想を申し上げますと、観客として端々で問いかけてられているような印象がありました。他のy/n作品でもあなたはどうか考えるの？と問いかけてることが多いと感じるのですが、今日も最後の「日本はどうか」というセリフは、あなたはどうか思うのか、どう説明するのか、と問われているような気がして、私だったらどう説明するだろうかとすごく考えました。また、この語りは誰のものなのか、当事者としての橋本さんの語りなのか、いろいろ想像が広がっていったら、ハッと終わって。先ほどオファーを受けたときの気持ちを教えてくださいましたが、橋本さんは多文化を語る役を引き受けたわけですよね。それは、アーティストが多文化社会をどう見ているのかを語ったり作品化したりする役を託されたことになりませんが、オファーを受けたときと作り進めていく中で何か変化はありましたか？

**橋本** あまり変化はなかったですね。オファーを受けたときから自分は何かの代表にはなれないし、何かを代表して語ることはできないと思っていました。たしかに僕は海外にルーツを持ってはいますが、それがすべてではありません。もちろん、企画のタイトルが「海外にルーツを持つアーティストと多文化共生」だったので、「多文化を語る役」を引き受けざるを得なかった部分もあります。ただ、無批判に作品の中である特定の属性だけを背負った語り手を登場させることは絶対にしかなかった。そのうえで今回の枠組みを通して何をどんな形であれば語ることができるのか。稽古の始めのころからそういう話をしていました。あとは、これは変化というか改めて考えたことを言うと、ルーツを語るときには家族のエピソードに少なからず触れる必要があって、僕の場合は母や親戚を介してブラジルについて知る機会が多かったので余計にそう感じるのですが、そもそも家族は自分とは異なる他者ですよね。つまり、自分のことを語ると言っても、そこでは同時に他者の話をしていく。そのことがすごく面白いなと思ったんです。また、演出や演技をしていくうえで非常に重要な要素だとも思いました。

**若林** 山崎さんは外国ルーツ、当事者ではないですが、作品づくりにあたってどのあたりから始めようと思いましたが？多文化共生というワードが提示されたわけですが。

**山崎** これは今回の作品に限ったことではないのですが、y/

nではまず扱うテーマに関しておしゃべりするところからクリエイションを始めます。そのテーマをどうしたら作品としてやることができるのか。どうしたら、というのはいくつかの意味があるのですが、方向的な意味はもちろん、倫理的にOKか、外からというより自分たちの基準として、これを語るの自分たちの「あり」なのか、といったラインを探る。その作業が最初の段階ではかなり大きいと思います。作品づくりはなんらかの当事者性からスタートするしかないと思っていますが、そうすると、自分についてしか語れないみたいなことにもなりかねない。でも観客は、舞台芸術の場でなくても、体験談を聞くことはできるわけです。むしろドキュメンタリー映画など、他のメディアのほうがそういうものには接しやすい。舞台芸術はその場に人がいるというメリットはありますが、同じ場を共有して誰かが語る、体験談をただ聞くということであれば、アーティストがやる必要はありません。ただのトークイベントでいいわけです。ただ体験を聞くのではない体験をどう作り出すか、テーマと関連させながらその体験をどう組み立てられるか、みたいなことを考えるところがいつもクリエイションのスタート地点になっています。

**若林** 当事者性と、当事者ではないけれど自分の中にある当事者性、小松理度さんの言葉をお借りすると「共事者」性をどう作り出すかということですね。途中で「日本語お上手ですね」、「ハーフですか」、「日本はどうか」という言葉はご自身の中で思い当たることだったりするのでしょうか。

**山崎** 今の自分は言わない言葉ですね。何年前だったら言っていたかもしれません。例えば橋本君が人からそう言われたという体験を語るのなら、単に「そういうことを言う人、いるよね」みたいになってしまって、観客とは関係がなくなってしまふ。でも字幕として出せば観客はそれを読まざるをえない。そうすると多少は観客自身が言っているみたいな感覚になるかなと思って使ってみました。今回はせっかくワークインプログレスの場をいただいたので、いろいろ試してみようと思ってやってみました。

**若林** 作品づくりでいうと、y/nの特徴は、非常に詳細に深くリサーチを重ねるところにあります。中間報告的に作られているテキストを拝見して、大変丁寧にルーツを探っていると知ったのですが、まずなにからどのように始めたのでしょうか。

**橋本** もともと僕自身が家族の歴史を詳しく知らなかったこともあり、まずは自分のルーツについて家族に話を聞きました。それをベースに、曾祖父母の時代から現在の僕に至るまで、誰がどこにいてどんな生活を送ってきたのかということ、いわゆる家系図的な時間の流れで整理しました。この中間報告書を出発点にパフォーマンスの内容も考えていったのですが、報告書の段階では実際の上演よりもストーリー性があるといえますか、ドラマチックにまとめている部分が非常に多かったんですね。それは、話をしてくれた僕の親が家族の歴史をドラマチックなものとして記憶していたからなのかもしれませんし、僕自身がある種の「物語」や「ドラマ」のようなフィルターをかけてその語りを聞いていたからなのかもしれません。

いずれにしても、自分や家族の話を「ストーリー」としてただ単に消費することは避けたかったので、そのためのアプローチの方法についても考えながら創作を進めていきました。

**若林** おそらく山崎さんもこのテーマでいろいろ調べたことを作品に投影されたと思います。例えば、永住許可に関するガイドラインは、どう読んでどう活かしていこうと思われたのでしょうか。

**山崎** y/nの作品では毎回、テーマに関連する法律についてリサーチしてその文言をパフォーマンスに組み込むということをしています。今回でいえば、社会と橋本君がどう結びついているのか。法律は社会のルールを示すものですが、私たちは実はその詳細を知らなかったりします。永住許可に関する規定は僕も今回調べて、初めて知りました。それを読むというだけでも、大きなインパクトがある。深くリサーチすることは重要だと思いますが、一方で、簡単にアクセスできる情報なのに私たちが知らないこともたくさんある。そういうものを示したい。先ほどのパフォーマンスで使った「ガイドライン」も「永住権 許可」と検索したときに上位の検索結果として出てきたものから使う素材として選んだものです。

**若林** ガイドラインを読んでとても驚きました。「素行が善良であること」とか「その者の永住が日本国の利益に合すると認められること」の「日本国の利益」とはいったいなんだろうと。また橋本さんがあえて指摘された「公衆衛生上の観点から有害となるおそれがないこと」というのもいったいどうしたことなんだろうと。

**橋本** 僕もガイドラインの存在は今回初めて知りました。永住許可については母曰く、僕が小さい頃に親戚の協力で得たものだから、僕としては記憶になかったこともあって昔から当たり前のように自分が持っているものだと思っていました。何も知らなくても生きていける環境にいられた、ということでもあると思います。「公衆衛生上の観点から有害となるおそれがないこと」というのは、例えばこの文を「永住を許可された僕」が舞台上で読み上げても、ああじゃあこの人は「有害となるおそれ」がないんだな、とはならないと思うんですよね。そうしたとき、いろんな問いが観客の中で立ち上がり始める。そういう点を大事にしました。

**若林** 「善良であること」について書かれている下の小見出しにまたびっくりしました。「法律を遵守し日常生活においても住民として社会的に非難されることのない生活を営んでいること。」とあって。「社会的に」の「社会」とはどこなのについて言っているんだろう、あなたは思うの？と聞かれているような気がしましたね。

## 2. レクチャー・パフォーマンスという形態について

**若林** 今回のレクチャー・パフォーマンスはこれまでの、男

性同性愛者のカミングアウトの作品『カミングアウトレッスン』、セックスワークについての『セックス／ワーク／アート』、日本における手品の歴史『あなたのように騙されない』の3作品とは全く違って、自分たちが今までやってきたテーマではないという話がありました。同じレクチャー・パフォーマンスをやる場合も、テーマが違うとアプローチが違うのでしょうか。

**山崎** y/nは基本的にパフォーマーが橋本君だけなので、一人芝居など、こういった形のパフォーマンスしかできないという制約がまずあります。レクチャー・パフォーマンスをやるときに、例えば『カミングアウトレッスン』では体験談を語って観客に聞いてもらうということ、『セックス／ワーク／アート』のときはお金を払ってパフォーマンスを見るということ自体を枠組みにして作品を作りました。『あなたのように騙されない』では舞台上で手品をやって見せることで観客が橋本君を信じたり疑ったりするように仕向けた。そうやって、パフォーマーである橋本君と観客とがどう関係を結ぶのかが決まらなと、レクチャー・パフォーマンスという形が決まっていたとしても、作品全体の方向性は固まらない。今回に関していえば、根本に立ち戻り、なぜ橋本君がここにいるのか、観客はそれとどう関わるのかということを考えるところから始めました。

**橋本** 僕がここにいることを扱っていくのと同時に、ここにいない人たちのことも忘れないようにしました。例えば僕はここに立って「しゃべる権利」を持っているけれど、ここに立ってなかったり、話せない人もいます。それは観客との関係を考えるうえで「語り手」である僕の存在をどう位置づけるのかという問題ともつながります。そういう意味では、根っここの部分はこれまで過去作でおこなってきたアプローチとそこまで大きくは変わらないのかもしれませんが、最初の方で「語り役の引き受け」という話も出ましたが、絶対的なポジションで何かを語り続けるというよりは、演劇的な仕掛けを使って観客を巻き込みながら、「語れなさ」についても扱いたいなと思いました。

**若林** 立場の流動が起りやすいのかもしれないと、感じました。ただ教えるという学校での一方向のレクチャーと違って、パフォーマンスというアーティスト的な仕掛けが入ることで、自身が観客に教えられる立場にもなれる良さがありますね。

## 3. 今回のワークインプログレスについて

**若林** ワークインプログレスで途中を公開するというのはどういう気持ちなのでしょう。また、今回のこのタイミングでの公開はお二人にとってどんな意味がありますか。

**山崎** オファーをいただいたときに、スケジュールの都合でパフォーマンスの準備時間があまりとれないことがわかっていたので、それならワークインプログレスという形で短めのパフォーマンスをやり、本公演につなげようということになりました。せっかくのワークインプログレスなので、もっと「作り途中です」みたいなものでもいいと思って始めたのですが、今

回は今回で作品としてそれなりにまとまった形にはなったかなと思っています。他の作品も再演を前提に作っているの、それとさほど意識は変わりません。

**橋本** ワークインプログレスという枠組みだからこそ、いろいろと試せたアイデアがありました。例えばポルトガル語でパースデーソングを歌って観客に手拍子を促したり、台本の紙を破いてそのまま上空にばらまき、それを雪の降る様子に見立てたりなど、これまでやってこなかった語られる内容の情景を立ち上げるような演出にもチャレンジすることができました。

**山崎** 2023年の2月に本公演を行うことになっていますが、途中で発表の機会があるおかげで、そこからもう一回考え直すことができる。そうやって時間をかけて作品を作っているのは作り手としてはありがたいですね。

**若林** プロフィールを読むと、y/nの名前の意味ってすごくたくさんあるんですね。その中に「答えに達する以前の状態」というのがあって、まさにワークインプログレスにぴったりだなと感じました。

## 4. y/nにとって今の状況下で作品を作ること

**若林** 質疑応答に入る前に、現在世界で起きていることに少し触れたいのですが、異なる国や地域、異なる人種や言語の違いがより鮮明になり、共に生きるということが非常に困難だという気がしてしまいます。違ってないように思える人々の間でも、なかなか共に生きることは難しい。ウクライナ問題のようなことが目の前に起きると、自分が普段見聞きしていたことも何か違うように感じてきます。ものを作るということに向き合っているお二人は、こういう状況の中で作品づくりをするときにどんなことを考えていますか。

**山崎** こういう状況、という言葉が指すものはいくつかあると思いますが、まずコロナの話をする、y/nは2019年10月末から活動を始めて最初の公演が2020年2月と、ほぼコロナ禍でしか活動をしていないんです。だから、y/nの活動という意味では今の状況がデフォルトになっている部分があるんです。ただ、y/nのパフォーマンスでは、同じ部屋に集まって話を聞くということが一番基本のところにあるので、クリエーションは毎回、人が集まるということ自体を考え直す機会にはなっている。それは、世界で起きつつあることにそのままつながっていると思います。漠然とした言い方になってしまいましたが。

**橋本** 少し話が逸れるかもしれませんが、今回僕たちが参加した公開レクチャーシリーズの企画と同時期に「シアター・コーディネーター養成講座《多文化共生・基礎編》」と題された連続講座が開かれていて、田室さんの部署がその企画も担当されていたこともあり、何度か見学させてもらう機会がありました。講座では「芸術文化を通して地域・社会づくりに貢献する人材育成を目指す」という企画の主旨に沿って、一般公募

で集まった受講者たちがグループワークを行い、劇場やアートに関連した多文化共生の企画を考えて発表し合っていたのですが、そこで度々話題に挙がったのが、「私たちは同じである」という考え方でした。多文化共生に関する企画を設計する時に、参加者が互いの「異質さ」に触れる環境をデザインすることはもちろん大事だけど、「私たちは同じ人間である」という経験を通して自分や他者を肯定できる機会や場所を作っていくこともとても重要だ、というような話が今でも印象に残っています。その考え自体はよく理解できますが、一方で、いざものを作って届ける立場になると、自分は「同じでなさ」に比重を置くことが多いかなと思います。「異なること」と「同じであること」のバランス具合というか、折り合いのつけ方をどうすればよいのか、常に揺れ続けている状態です。

**若林** 今考えていることを伺っておけてよかったです。約1年後の本公演に向け、現時点でまわりで起きていることやご自身の中での考えの変化が、どのように作品に投影されていくのか楽しみです。

### y/n

2019年結成。演出家・俳優の橋本清と批評家・ドラマツウルクの山崎健太によるユニット。リサーチとドキュメンタリー的手法に基づいて私的な領域の事柄を社会構造のなかで思考するパフォーマンス作品を発表している。ユニット名はyes/noクエスションに由来し、二項対立や矛盾、答えに達する以前の状態を意味する。これまでの作品に男性同性愛者のカミングアウトを扱った『カミングアウトレッスン』（2020）、セックスワーカーと俳優の仕事の扱った『セックス／ワーク／アート』（2021）、日本における手品の歴史を扱った『あなたのように騙されない』（2021）、東京芸術祭ファーム2022 Farm-Lab Exhibitionでの国際共同制作によるパフォーマンス試作発表『Education (in your language)』（2022）がある。



撮影：山端拓哉



【レビュー】  
日本語の多文化共生  
ミヤギフトシ



【レビュー】  
分離と再生の  
ワークインプログレス  
落 雅季子

## 5. フォームに寄せられたコメント、質問への応答

途中で壁にいわゆるマイクロアグレッションとされるような文言が投影されていて、橋本さんの個人史と、日本では日本人であるという特権を持った自分との間に、橋本さんの個人史を他人事にしない現実を引き戻される感覚がありました。

**山崎** ありがとうございます。多文化共生の話がきたときに、差別の話はどこかしら関わってくるだろうなと思いましたが、割合としてはあまり多くならなかったですね。

**橋本** 僕が積極的にオープンにしなかったからなのかもしれません。また、どこかで無意識にその話に自分自身で蓋をしていたのが影響したのかもしれない。構成・演出をする立場としては、ルーツを扱う作品の中で差別、特に差別を受けた経験などをメインに置いてしまうと、それがあつ種の「消費」につながってしまう可能性もあるため、慎重になっていました。

**若林** 現実を引き戻される感覚があったというのが非常に大事ですね。

混血が進み、人種調査の意味がもはやないというのが多文化共生そのものだと思います。永住権許可の条件にあった「公衆衛生上の観点から有害となるおそれがないこと」というのはどういう意味なのでしょう。

**山崎** そこは『地球の歩き方』に書いてある文面をそのまま読んだ箇所です。これはアイロニー込みで読みました。例えば、「LGBTQという言葉がなくなったほうがいい」という意見と同じような響きを感じるんですね。つまり、そこに存在してしまっている「境界」を見ないようにすることによって問題ごとくないことになってしまっていないかということなんですけど。



ブラジルのことなので厳密にどうかは僕にはわからない面はありますが、『地球の歩き方』の文章は調子が良すぎるなと思いつつ読んでいたところではありました。

「公衆衛生上の観点から有害となるおそれがないこと」という文面は最初はなかった部分なのですが、このご時世なので、公衆衛生上、つまりコロナの関係ではじかれる可能性もあるんじゃないかと思って、今回読むようにした経緯があります。具体的に何を意味するものなのかということまでは今回はリサーチできませんでした。このパートはもしかしたらなくなるかもしれませんが、本公演までにもう少ししっかり調べておきます。

**橋本** どういう形でパフォーマンスに活かせるかわからないのですが、解釈次第でなんとでもなる要件だと思うので、時代ごとの線引きのされ方などリサーチしていきたいです。

**若林** 法律を決めたときの社会背景も見えてくるかもしれないですね。

自分の家族や友人のことを思い出しながらとても興味深く拝見しました。橋本さんのこれまでの作品を拝見したことがないのですが、どのように演劇に出会ったのか、演劇にどのような可能性を感じているのか伺いたいです。

**橋本** 演劇に出会ったと感じた僕の原体験は中学3年生のときです。受験校の下見も兼ねて希望する高校の文化祭に行ける機会があって、そこで上演されていた演劇部の発表に衝撃を受けました。どんな作品だったのかはもう全然記憶に残っていないのですが、体育館のステージの上で役者がものすごく大きな声でセリフを出していて、舞台上に立つだけであんな大声が許されるなんてなんでなんだろうとか、ほんとに凄いなあととか、とにかくポジティブに興奮してしまったんです。

それで、このときの演劇との出会いがキッカケになって、高校で演劇部に入りました。そこでは演出やその他のいろんなスタッフワークで作品に携わり、ときどき俳優もやる機会があったのですが、部活を引退するときにもう俳優という活動は自分にはできないなと思ったんです。それは、台本に書かれた決められたセリフを自分の言葉のようにしゃべれないということに限界を感じてしまったからなんですけど。それから、演劇学科のある大学に入学して、主に演出という立場から演劇に関わるようになっていきましたが、2、3年前から俳優としての活動をするようにもなりました。活動をはじめた理由はいろいろある

### 若林 朋子 (わかばやし・ともこ)

(撮影：安田有里©Ko Na design)

プロジェクト・コーディネーター/プランナー/立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科特任教授。デザイン会社勤務を経て英国で文化政策を学ぶ。1999～2013年企業メセナ協議会勤務。企業が行う文化活動と芸術支援の環境整備、企業によるメセナ活動の企画開発に従事。2013年よりフリー。「ともに最適解を考える」をモットーに、事業コーディネーター、執筆、編集、調査研究、評価、助成プログラムの開発、コンサル、自治体の文化政策やNPO運営支援等に取り組む。

んですが、一番大きかったのは必ずしも台本に書かれた言葉を「自分の言葉」としてしゃべる必要はないことに気づいたからです。それはテキストを「他者の言葉」として扱っていく、ということでもあります。また、今回のように自分の話をする場合でも、そこで語られる言葉はそもそも編集されていたりもするし、観客に見られている自分の身体が舞台上にあったりもして、ある意味で「他者」になっている部分がある。そういったことを考えながら俳優活動を続けていくうちに、「自分と他者とはなんだろう」という問いを自分の身体や観客の身体を通して考えられるメディアとしての演劇に、可能性ややりがいを感じるようになりました。俳優としての実感ベースでの答えにはなりませんが。

橋本さんのルーツを聞いているだけですが、こちらへの問いかけに緊張感でいっぱいでした。

**橋本** ありがとうございます。僕も緊張しました(笑)。ただ、緊張自体はお客さんとの関係を作っていく上で良いことだと考えているので、できるだけ皆さんの顔や反応を見ながら、その都度お客さんからのリアクションを感じたり、それに自分自身が影響されたりできるように、観客への語りを組み立てていきました。

**若林** 照明を落とさないで明るいままなのも、そういう意図からですか？

**橋本** そうですね。観客席の照明を落とさずに、観客と地続きのところに僕がいるという空間を作ることは、舞台上で語られるいろんなことを「他人事」にさせないための方法のひとつとして取り入れています。今までのy/nの作品も基本的には、そういう理由で地明かりでやってきました。

観客のルーツや人生経験によって感想が大きく変わるパフォーマンスだったと感じました。今回日本語話者を対象にしたワークインプログレスだとは思いますが、本公演ではどのような方を観客に招きたいと考えていますか？

**山崎** 『カミングアウトレッスン』は男性同性愛者の体験談を語るという作品だったのですが、そのときは基本的に、同性愛者をメインの観客に想定して作っていました。人数比の問題もありますが、芸術を通してマジョリティにどう働きかけができるかというところに主眼を置いていたということですね。一方で、男性同性愛者の観客のほうが、「あるある」みたいな感じでうけていたりもしました。今回に関して言えば、二人の使用言語は日本語で、英語がちょっと話せるくらいなので、パフォーマンスは基本的に日本語ですることになります。そうすると、パフォーマンスの観客として想定されるのがまずは日本語話者になるということもあります。また、もし日本にいる海外ルーツの方のエンパワーメントとして芸術を使うのであれば、こういう形ではなく、何かと一緒に作ることのほうが効果は高いと思います。もちろんマイノリティを排除するわけではないのですが、アーティストとしてこういうことをやるので

あれば、マジョリティの側に働きかけることが中心になる、今のところはそうしていきたいと思っています。

**橋本** 言語の問題は本公演でも考えなければいけません。今回は前説パートで少しだけポルトガル語を、本編では日本語を使いましたが、例えば英語という言語についても検討する必要があります。それは社会の中での英語の位置づけをどう扱うのかといったことにも関わりますし、y/nの作品は基本的には国内も含めて国外でもレポートリーとして再演したいと思っているので、そうしたときに英語字幕をどうするかといったこととつながっています。

**若林** 英語というものの捉え方をもう少し聞かせてもらえますか。

**橋本** 英語といっても種類はいろいろありますが、多文化共生の作品を発表するうえで、英語さえ用意すればそれでいいのかという問題があると思います。共通語としての英語を前提にしすぎているといえます。

**若林** 多文化について考えるときに大事な視点ですね。よく国際会議や国際ミーティングで、英語話者が一人でもいるとそれだけで国際ってなっている。国際ってなんだろう、それは果たして多文化を意識していることになるのかと感じます。

拍手ができませんでした。それはつまり自分の加害性が自覚されたからで、良いパフォーマンスでしたありがとう、という区切りを作ってしまうことへの引け目のようなものだったかもしれません。

**山崎** 非常にありがたい感想である一方、作り手としてはあまり「あなたは加害者です」ということを強く受け取られてしまっても困るというか、もう少しその手前で考えるくらいの塩梅にしたいなと思っています。ですから、最後の「日本はどうですか」という問いかけの言い方はすごく難しい。あまり問いを突き付けるみたいな感じにならないように思っていたのですが……。

**橋本** 過去作品でも、こちらからの問いかけによって観客の怒りを誘発してしまい、「あなたの作品はこの世界に存在しないで欲しい」というような反応も返ってくることもありました。そうなる手前で思考できる場所を作ることを、考え続けなければいけないと思っています。

**山崎** いただいたコメントはそういう意図の意見ではないと思いますが、観客の受け取り方として、自分が加害者だという感覚が強くなると、こちら側が糾弾している、あるいは啓発しているという向きが強くなりすぎてしまうとも思っています。作品を作りながら、そういう面についても考えます。今回のこのQ&Aは、ワークインプログレスだからやっているというわけではなく、y/nが全ての公演で実施しているものです。「観てどうでした？」と、観客と率直にやりとりすることを基本としています。どういうスタンスだったら、同じ場で考えるというこ



とが可能になるのか、これからも考えていきたいと思います。

**若林** 作品を通してなにか気づきがあるというのはすごく大きいことだと思います。「加害」という二文字から話が広がり、それについて考えていけることもまた意味がありますね。

名前を受け継いでいるところに、一族、家族的なものを強く感じました。国籍よりも橋本家というもっと個別的なルーツがみえてくる終わりに好感が持てました。

**橋本** 稽古の最初の段階で、ルーツってなんだろうという話をヤマケン（山崎）さんとしました。ルーツという一直線の過去の連なりみたいなものをパッと想像することが多いのではないかと思います。もっといろんなところから人が集まったり、反対にいろんなところへ人が去って行って、ある場所で複数のものが重なり合っているというイメージもあるのかもしれない、むしろそのほうが実感を持てるのではないかと思ったんです。単に「国籍」だけに回収されない、そういった集合体のようなものを考えながら、「橋本家」のエピソードの語り方を検討しました。

**山崎** 改めて橋本君の家族の話の聞いたら、お母さんが日系ブラジル人だということで、つまりそれは日本にもルーツがあるということですね。今回、橋本君からいろいろ話を聞いた中でおじいさんに焦点を当てたのは、「海外にルーツ」と言いつつも、そもそもルーツという言葉は常に複数形であるという点に着目したかったということがあります。

**若林** この作品の解釈だけではなく、一般的に日系人という存在を考えると、実はルーツはこっち側だと気づくというのも大きいですね。

「日本はどうか」という質問は、橋本さんが外国人として扱われ、まわりの日本人にかけられた言葉なのかなと思っていました。同じ質問でもいろいろ捉え方ができることに気がつきました。

**山崎** 「日本はどうか」という質問は3回出てきています。最初は、字幕で「日本語お上手ですね」「ハーフですか」「日本はどうか」という流れで出てきていて、これは橋本君に対する質問です。2番目に「日本はどうか」と出てくるのが、ブラジルの人種構成を僕が読み上げたあと。日本人の方に問いを投げ返すつもりで入れました。最後の「日本はどうか」は橋本君の肉声で観客に投げかけられます。「日本はどうか」という質問は、日本に住んでいる人が海外から来た人に投げかけがちなのですが、それを日本人が投げかけられたとき、きちんと答えられるか。そういうことを考えて、あのような形にしました。

**若林** 体験談を語る以上の作品にどうしたらできるかについては、山崎さんの存在がポイントのように感じました。

今回のワークインプログレスでは、映像オペレーターとナレーターというようなスタッフワークに徹していたと思いますが、本公演では山崎さんはどのような立場で舞台上にあがるのか興味があります。パフォーマーの一人のような役割になる可能性はありますか。

**山崎** 全く未定ですね。こうやってしゃべるのは緊張しますが、決められたことをやらなければいけないとなると途端にすごく緊張してしまうので、できればなにもやりたくない（笑）。今回は、舞台上にルーツが異なる人がいたほうがいいのかなと考えている部分もあり、考え中というところです。

**橋本** まずy/nの基本方針として、やりたくないことは無理してやらないというのがあります。ヤマケンさんが「スタッフワークに徹していた」とコメントにありましたが、実はこれまでのy/nの作品の中では、今回が一番、僕から山崎さんに発話についてのオーダーを出していました。そういう意味ではいわゆる俳優と演出家の関係になって、「パフォーマー」としてヤマケンさんを見ていた部分もあるかなと思います。本公演でどうなるかはまだ分かりません。「ルーツの異なる人間がいたほうがいい」という話をもう少し広げると、そこでは一体何をもちてルーツが違くと判断しているのか、ビジュアルや振る舞いがポイントになるのかといった重要な問題とも関わってきます。そういう点から話を膨らませるのであれば、ヤマケンさんが舞台上にいることが僕との「違い」を際立たせるための役割になるのかもしれないし、そのこと自体の問題を含めて、なにかしら観客へ問いを投げかけられることができるのかもしれない。

橋本さんは本日観客を前にパフォーマンスをして感じたこと、発見したこと、考えたことなどはありますか。

**橋本** 誕生日のシーンの拍手は、拍手をもらえるかどうか怪しかったので、パラパラと拍手をしったりしなかったりという観客からの反応がすごくありがたかったです。全員が拍手しても、それはどうなんだろうという気持ちもあったので、今回のばらつき具合がちょうど良いなと思いました。

**山崎** いただいた意見の中に「（ポルトガル語で歌われた）『ハッピーバースデー』は自分に理解できない言葉なので、内容が理解できない中でうかつに拍手して、盛り上げることに加担できないという怖さがあった」というものがありました。本当にそうだなと思いました。

多文化をテーマとする場合に、全くy/nとは関係のない外国にルーツを持つ人の話を扱ったり、より幅広く在住外国人の状況を取り扱ったりするという選択肢もあると思います。橋本さん個人を扱うと決めた理由をお聞かせください。

**橋本** 「海外にルーツを持つアーティストと多文化共生」というタイトルだったため、僕が海外にルーツがあることが企画参

加の条件になっていることは無視できないと思いましたし、そのこと自体を内容に盛り込みたかったので、僕個人の話を中心に扱うことを引き受けました。

**山崎** 僕は海外にルーツを持つアーティストではありませんが、橋本君の話をするのであれば、責任を半分ずつ持つてやることはできるかと思います。一方で、一緒に作品を作っていない人の話をするのは、自分の中で良しとできないと言いますか、どうしてもネタとして使うみたいな感覚になってしまい抵抗があります。他の人の作品を見るときにはまた別の基準がありますが、自分はそういうかたちでは扱えないというのが今の正直な気持ちですね。

**橋本** 今回、僕個人の話をメインに取り上げましたが、そこでは「家族」という「他者」の声も扱っていたと思います。

「海外にルーツを持つアーティストと多文化共生」というタイトルを見て、今日パフォーマンスが始まる前に思ったのは、海外をそのまま国外と認識できる非常に島国的な単語だなということです。大陸で国境を接する国が多くあり、紛争が絶えない世界情勢の中、海外という単語を使える国は特殊かなと改めて思います。外国にルーツを持つアーティストと多文化共生というタイトルでも企画の意味は通りまでするので、こうした単語一つ一つを深く読めちゃうほど、多文化と共生するグローバル化が進んだご時世ですね。

私は最近、事実婚しましたが、籍を入れていないということで社会的には夫婦として認められていない場面がたくさんあり悲しくなります。永住権を持つブラジル国籍の橋本さんにもなんとなく共有できる感覚かなと思うのですが、日本はずかしく異なる他者にほど、不寛容になりがちなムードがあると思います。ただアクティビスト的な動き方をしてしまうと、当事者は象徴になり消費されやすくなっていく。そうしたことを避けるために、揺らぐレクチャー・パフォーマンスを意識されているのでしょうか。

**山崎** 「話や体験談を聞きにだけ」というスタンスは、観客の皆さんの中にある程度はあるものだと思います。それをずらすということは毎回意識してやっています。

最初のアナウンスはなぜポルトガル語で読まれたのですか。

**山崎** 観客の皆さんに「パフォーマンスは日本語でやと思って来ていませんか」という問いを込めて、ポルトガル語から始めました。結局、その後は日本語しか使わないんですが。

多文化共生というのは耳ざわりがよい言葉ですが、

分断を受容することにもつながると思い、今日改めてその難しさや怖さを感じました。

永住権の読み上げで心が痛く、そして簡単にアクセスできるにも関わらず、知ることができていなかったことに恥ずかしさを覚えました。個人的には、最後の結びが「日本はどうか」より、次回に本公演するとき、地続きで常に問題としてあるようなことを最後に訴えてもいいのかなと思いました。また、先ほど若林さんとの前半のトークで出ていた、橋本さんの家族から聞いたエピソードのドラマ性を削る作業（言い方を変えるとy/nのレクチャー・パフォーマンスの形であるとおっしゃっていた、淡々と情報を伝える作業）と、一方でワークインプログレスとして観客を巻き込む仕掛け（ハッピーバースデーや雪）の塩梅は難しいなと思いました。個人的にはハッピーバースデーはドラマが強すぎるように思いましたが、これはレクチャー・パフォーマンスのパフォーマンス要素をどこまで、なんのために足すのかによるんだろうなと思いました。1937年の橋本さんのお祖父さまの名前が、「Hashimoto Kiyoshi」と橋本さんと同姓同名なのは、三代目、ジュニアであるという理解で合っていますでしょうか。

**橋本** はい。その理解で合っています。祖父と同じような立派な人になってほしいという理由から、孫の僕に同じ名前をつけたそうです。

**若林** 本公演に向けて、今日の感想も含めて最後に一言ずつお二人にだけたからと思います。

**山崎** 本公演は、この続きが作られるのではなく、一旦これをバラバラにして、パフォーマンスを組み立て直す形になります。今回は比較的橋本君にフォーカスして、あとはおじいさんだけという形になりましたが、他にも家族の話など、いろいろ話をしているところなので、もう少しさまざまな内容を扱ったパフォーマンスになるのではないかと予想しています。



**橋本** 今回、実際にパフォーマンスをしてみて改めて、舞台と客席にいるいるなことが起こってほしいと思いました。また、決して「海外」という大きな言葉だけに僕や観客の皆さんが覆われることのないようにもしていきたい。自分は海外のルーツ以外にも、いろいろな属性がここにいます。そういったことを、演出や仕掛け、構成などうまくリンクさせて表現できたらいいなと思っています。本日は、たくさんの感想やご意見をくださりありがとうございました。

**山崎** 今回使用したQ&Aのフォームは、これからも開いたままにしておきますので、いつでもご意見やご感想をお送りいただけるとありがたいです。

**若林** それはいいですね。今日、観客の皆さんは、考えるきっかけをお二人からいろいろと受け取ったと思います。多文化共生とは、考えることを避けないこと、考え続けることが大事だと、今の世の中の動きを見ていると思います。引き続き、多文化共生について考えつつ、y/nの作品を楽しみにしたいと思います。

## REVIEW

### 答えは出さない

肥高茉実

挽き割りにした小麦と牛挽き肉、玉ねぎ、ミント、スパイスを練り合わせ、楕円形に成型して狐色になるまで素揚げする。隠し味のミントとスパイスが効いたこのミートボールは、「キビ」というアラブの食文化がもともなったブラジル料理であり、ブラジルにルーツを持つ橋本の好物だという。日本の反対側に位置するブラジルは、北部は先住民であるインディオやサハラ砂漠西方のアフリカ系から、中部はポルトガル系移民のほかイタリア系も多く、サンパウロ近郊には日系人や、シリアやレバノンなどの中東系と、さまざまな人が暮らす移民の国と言われる。キビは、移民難民とともにアラブの食文化が大西洋を渡ったという歴史の象徴だ。橋本はそんなキビのレシピをスライドで紹介すると、ぎこちないブラジルポルトガル語でパースデーソングを歌いあげ、観客に問う。「日本はどうですか？」

スライドには、日本の出入国在留管理庁が公式ホームページに掲載している、外国人への永住許可に関するガイドラインも映し出された。(1) 素行が善良であること、(2) 独立の生計を営むに足る資産又は技能を有すること、(3) その者の永住が日本国の利益に合すると認められること。(3)には「公衆衛生上の観点から有害となるおそれがないこと」と補足されている。橋本はガイドラインを読み上げ、「僕は法的条件を満たしているので、日本で暮らし働くことができます」と説明する。「永住」というたった一言の検索ワードから最短距離でアクセスできる情報にもかかわらず、私を含む観客の多くはそこで初めてガイドラインにたどり着いたのだった。

スライドを用いてイメージとテキストを往復するように進められるこのプレゼンテーションは、レクチャー・パフォーマンスという芸術の一形式(のワークインプログレス)である。レクチャー・パフォーマンスでは、演出家やアーティストが自ら舞台上上がって観客に直接語りかけ、語りに演劇的要素、ときにマスメディアやインター

ネットから借用した画像・テキストなどのハイブリッドな要素を融合させながら、講義というアカデミックな形式を超えたパフォーマンス作品へと昇華させていく。実験的に上演されたy/nのレクチャー・パフォーマンスのワークインプログレスは、橋本の出自や体験をたどる個人的な内容でありながら、料理や誕生日といった万国共通の概念にコントラストを当てるようにして、日本人の多くが自国の法律を把握せずとも「一応」問題なく暮らすことができ、「一応」社会の秩序も保たれてきたという、マジョリティの無自覚な特権を逆照射するものであった。それは、そもそも社会におけるルールの大半が対話のプロセスなく管理の観点からのみでつくられてきたこと、またルールが目には見えない大きな力となっていかに公共の秩序を曖昧なオートモードで保ってきたかということに気付く瞬間でもある。

y/nは、レクチャー・パフォーマンスのワークインプログレスを通じて、置かれた環境を分析しながら新たな批評性を見出していく橋本の反省的なナラティブをひらいた。「日本はどうですか?」。再びこの問いを立て、対話を始めるように作品は終わる。対話とは、相手の語りをそのまま受け止めず、目には見えない状況も含めて相手をよく知ろうとする態度から始まるのであり、私たちは問いつづけることによって曖昧に失ってきた社会や人生への主体性を取り戻すのだと思う。ユニット名の「y/n」は、二項対立、矛盾、答えに達する以前の状態、検索不可能性=不可視性、匿名性、個人的な欲望、円を含意する。例えば食において、酸味や苦味、甘味を知ることによって相対的にスパイスの楽しみ方が広がっていくのと同様に、他者とのコミュニケーションも、私たち一人ひとりが二項対立のような解像度の粗い考え方から脱し、グラデーションのように目の前の存在をとらえることから豊かになっていくのではないかと——y/nの作品はそう問いかけてくるようだった。



## 日本語教室ワークショップ



## 事業について

本プログラムは、日本語を学ぶ在住外国人の方を対象に、演劇や音楽などを用いて言葉や身体を使った様々な表現を促すことで、コミュニケーションの活性化や日本語の習得、参加者の創造性の発揮につながるワークショップを開発することを目的に進めました。

学習院大学は、東京芸術劇場のある池袋駅から一駅隣の目白駅にキャンパスを置き、豊島区周辺に在住、在勤、在学の人を対象とした日本語を勉強する人のために「わくわくとしま日本語教室」を開催しています。その教室との連携・協力のもと、演劇ワークショップファシリテーターとの事前デモンストレーションやディスカッションなどを重ね、内容の異なる5つのワークショップを実施しました。

本記録集では、実際に行われたプログラムをより具体的にイメージできるよう、各回で実施したプログラム内容や学習者の反応、ファシリテーターの所感を記載しています。

### ● 学習院大学「わくわくとしま日本語教室」とは

豊島区周辺に在住、在勤、在学の人を対象に、生活に役立つ日本語を教えている教室です。入門編の「わくわくクラス」と、その次の段階となる「ぐんぐんクラス」の2クラスがあります。

## 事業データ

### ● 実施日時／会場／参加者数

第1回：2021年 9月 25日（土） 10:00-12:30／学習院大学／ 9名（ぐんぐんクラス）  
 第2回：2021年10月 9日（土） 10:00-12:30／学習院大学／ 4名（わくわくクラス）  
 第3回：2021年11月 27日（土） 10:00-12:30／学習院大学／ 10名（ぐんぐんクラス）  
 第4回：2021年12月 25日（土） 10:00-12:30／学習院大学／ 5名（わくわくクラス）  
 第5回：2022年 2月 26日（土） 14:00-16:30／東京芸術劇場／ 15名

### ● ファシリテーター

柏木俊彦、史桜、関根好香、前嶋のの、松岡大

文・関根好香（第1回～第5回：プログラムの流れ、ファシリテーター所感）

## 第1回

実施日時・会場 2021年9月25日（土）10:00-12:30 学習院大学

ファシリテーター 柏木俊彦、関根好香

学習者人数 ぐんぐんクラス 9名

テーマ

「タクシーに乗る」

\*学習テーマ・教材は、教室で普段使用しているものを用いてプログラムを構成した。

目標

・演劇的手法による授業の活性化  
 ・いつの間にか日本語への自信を持ち自己表現のきっかけとなることを目指す。

### プログラム内容

#### 会場準備

机を使ったエリアと、椅子をサークル上に並べたエリアを用意した。サークルの中の床には格子状にビニールテープを貼った。「0）予習時間」以外はサークルのエリアを使用。

#### 0）予習時間（10:00～10:15頃）

通常の授業と同様に、教室に着いてから最初の15分間は予習をしたり、最近の出来事などについて、学習者や日本語教室のスタッフとコミュニケーションをとる時間を設けた。（以下、第4回まで同様）

#### 1）ウォーミングアップ

まずは、ファシリテーターの身体の動きや声の真似をして、ほぐしていく。次に、自分の名前を言いながらポーズを作り、他の学習者はその真似をしてくり返す。その後、今回のワークショップで使用する単語に触れる時間として、A4サイズの単語カード（目的地名や建物名など記載）を使ってくり返し声に出して読んだ。カードを一枚ずつ隣の学習者に渡し、カードを持った学習者はその単語を読み、全員で復唱する。同様の流れを全部の単語で行った。

#### 2）プログラム「クロス・ザ・サークル」「ムーブ」

「クロス・ザ・サークル」は、学習者が単語を言いながら、リレー形式でサークルの中を縦断していくワーク。前述の単語カードを一人1枚ずつ持ち、リレーの第一走者となる学習者は、他の学習者が持っているカードを1枚決め、そのカードを持つ学習者の席へ単語を言いながら移動する。何回かスピードアップしながらくり返し、ゲーム要素のある中で、単語に慣れていった。

「ムーブ」では、全員が同じ方向を向いてサークルの中に立ち、一番前にいるファシリテーターを真似して、「進みます」「曲がります」などの移動に関する言葉を身体を動かしながらくり返した。次に、サークルの床に貼ってあるテープを道路に見立て、「進みます」「曲がります」などの移動に関する言葉を言いながらリレー形式で目的地（次の人）へ移動するワークを行った。

#### 3）プログラム「ディスカッション」

「ディスカッション」では、どんな時にタクシーを利用するか、学習者一人ずつに聞いた。個人的なエピソードや教材以外の単語が出てくることもあり、学習者同士がその言葉を教え合う場面もあった。

#### 4 メインプログラム「目的地へ行こう」

「目的地へ行こう」では、道路に見立てたテープが貼ってある床に、単語カード（目的地名や建物名）を置き、教材の会話（例文）を用いて、タクシーに乗る練習をした。学習者は、タクシーを止め、行先を伝える。タクシー運転手に道案内をしながら、目的地に着くと、運転手から言われた料金を支払う。それぞれが自由に目的地を設定し、到達することができると共に、お釣りのやり取りなどを即興的に楽しむ場面も見られた。



#### ファシリテーター所感

日本語教室での初めてのワークショップであり、学習テーマや教材は日本語教室で使用しているものを用いてプログラムを構成した。学習者は、身体を動かすことから始まる授業進行に最初は様子を窺いつつも、徐々に慣れて前向きに楽しみながら参加している姿が見受けられた。身体動作を伴うワークや空間の使い方によって、日本語の理解と習得がスムーズになったのではないかと考えられる。また、各自のエピソードや、遊び心のある即興的なやり取りをくり返して、お互いをよりよく知る時間



にもなっていたように思う。ファシリテーターは、日本語教室という場所での初めてのワークショップで、解説や質問の回答の際の言葉選びに苦労している場面が随所にあった。伝わる言葉（やさしい日本語）選びに慣れていく必要があると感じた。

#### 学習者アンケートより

- 先生はとてもやさしいので、授業が楽しかったです。単語の勉強ほうほうもわかりやすいと思います。
- きょうのべんぎょうはたのしかったです。あたらしいみもなりました。せんせいもたのしかったです。あそびからべんぎょうはたのしいとおもしろいですね。
- 1. 体の動きこと：体操のような感じで単語を覚えました。これはいいです。  
2. タクシーに乗ることは：実際に練習しました。日常生活に助けます。
- としさんとよっかさんはやさしいです。今日の授業はほとにうれいす。  
(※以上、原文ママ)
- 今日の授業はとても面白かったです。実用的な単語を学習し、覚えることができました。今後は、もっとこのようなタスクで学習できたらいいと思っています。(※原文中国語)
- 今日の授業はいつもの授業と違い、実際に体を動かして、動作と行為を通してたくさんの単語と文型を覚えることができました。このようなやり方で学習した知識を定着させることができます。また、タクシーに乗ると言うタスクはすごく楽しかったです。(※原文中国語)
- 前半の部分はちょっとつまらなかったです。後半は前半より面白かったです。いずれにしても、先生たちのご指導に感謝します。(※原文中国語)
- 今日の授業はとても楽しかったです。特に先生方の授業の進め方が良かったです。説明も分かりやすく、何よりも失敗しても恥ずかしくなかったです。(※原文英語)
- タクシーの乗り方と何をタクシーで言うかを学びました。  
(※原文英語)

## 第2回

実施日時・会場 2021年10月9日(土) 10:00-12:30 学習院大学

ファシリテーター 中村一規、松岡大

学習者人数 わくわくクラス 4名

テーマ 「病院に行く」  
\*学習テーマ・教材は、教室で普段使用しているものを用いてプログラムを構成した。

目標 初診受付で手続きをすることができる  
●病状に合わせて適切な病院・診療所を選ぶ  
●初診であることを伝えられる  
●受付で体調に関する質問や病状について簡単に答えることができる

#### プログラム内容

##### 1 ウォーミングアップ

まずは、本日のゴールとなる会話文を黒板に貼り、ファシリテーターがデモンストレーションとしてその会話のロールプレイを行った。学習者は、それを見た後に復唱した。その後、「ストレッチ」を行った。サークル状に立ち、中央にいるファシリテーターの動きを真似した。ファシリテーターは体の部位を言いながらその部位をほぐすように動かし、学習者は復唱しながら真似して動かし、少しずつ動きを進展させ、隣の人と指先をつなげて全員がひとつつながる場面もあった。



##### 2 プログラム「体のパーツを覚えよう」

「体のパーツを覚えよう」では、ファシリテーターの真似をしながら、学習範囲となる頭から足までの各部位を使った動きをした。自然と笑いが起こるようなおもしろい動きが学習者からも提案された。その後、空間を自由に歩きまわる中で、「ひざ」などの部位の指示が出たら即座に近くの人とその部位をくっつけて歩く、というゲームを行った。身体接触が最小限になるように、指示する部位は膝や背中などに限定した。

##### 3 プログラム「病院で集まろう」

「病院で集まろう」では、空間の四隅に椅子を置いて診療科目（眼科など）を設定し、ファシリテーターが言った科にすぐに集まるというワークを行った。最初は科の名前、次に体の部位を言い、その部位から何科に行くかを判断して、該当する体の部位を痛がりながら移動するという表現に展開していった。その後、四隅に置いた椅子（診療科目）のところに学習者が立ち、受診者役の学習者が指示を出された科に行き、受付役の学習者とテキストにある会話文を練習した。

##### 4 プログラム「症状を表す言葉を覚えよう」

「症状を表す言葉を覚えよう」では、症状に関する言葉（「痛い」「かゆい」など）と、程度を表す言葉（「ちょっと」「すごく」）を、体の動きと共に復唱して確認した。また、体の部位と症状を組み合わせたパターンを動きと共に確認し、ファシリテーターが言った組み合わせを即座に動きと言葉で表現した。くり返し行うことでパターンを習得していった。

##### 5 メインプログラム「初めてなんですけど…」 「先生、先に見てください」

「初めてなんですけど…」では、舞台エリアと観客エリアに分かれ、舞台エリアに病院の受付をセットして一人ずつロールプレイを行った。受付に立つファシリテーターは白衣を身につけて、場面の雰囲気を出した。学習者は受診者となり、部位と症状の組み合わせを自由に設定して、初診受付のロールプレイを行った。「先生、先に見てください」では、医師一人に対して二人の受診者が同時に訪れ、どれだけ大変かを動きと言葉で訴え、見ている人がどちらがより大変そうだったか挙手するというゲームを行った。

## ファシリテーター所感

第2回目のワークショップは、1回目同様、日本語教室と同じ学習テーマと教材を用いてプログラムを構成した。テーマが「病院に行く」という身体に関連するものだったこと、担当したファシリテーターの特性（ダンサー）により、身体を動かす割合の高いワークショップとなり、学習者は楽しみながら参加していた。学習者間には日本語レベルの差があったが、解説やテキストがやや難しいと思われる学習者には、ファシリテーターがそばについてサポートしながら進めた。その安心感により、ワークに前向きに参加できており、モチベーションの維持につながっていたように見受けられた。メインプログラムのロールプレイは遊び心を持って演じられており、失敗を恐れない場づくりができていたと思われる。ただ、最後のロールプレイに関しては、学習者自身に勢いがなく取り組みにくいものだったため、丁寧に段階を踏んだプログラムづくりの必要性を認識した。

## 学習者アンケートより（原文は英語または中国語）

- 体を動かしながら学ぶのが楽しかったです。また、皆さんとても親切でした。とてもいい授業！

- 普段よりは話す・書く機会が少なかったですが、新しいことを学ぶのにとっても楽しい方法でした。書かずに覚えるのは良い方法だと思います。体で表現したり、他の生徒の事を知れたのも良かったです。
- 今日の授業は楽しく学ぶことができました。みんなは自分の役割を演じてとてもよかったです。実際に体を動かして、たくさんの単語を覚えることができました。
- 実際に体を動かして、単語を覚えることができました。また、様々なタスクを通して、緊張をほぐすことができ、リラックスしながら学ぶことができました。先生のパフォーマンスはとても素晴らしいです。



## 3.メインプログラム 「紙芝居をつくる[ディスカッション]」

「紙芝居をつくる[ディスカッション]」では、まずグループワークの作業内容（物語を決める→絵や文を書く→練習→発表）について説明し、3つのグループに分かれた（グループ分けについては日本語教室のスタッフに依頼）。各グループに1名のファシリテーター・サポーターが加わり、進行や内容をサポートした。物語を決める段階では、お互いに質問をして内容を確認しながら選んだ。

## 4.メインプログラム 「紙芝居をつくる[作業・練習・発表]」

「紙芝居をつくる[作業]」では、4枚の紙芝居の構成を考えて、絵を描いたりセリフや文章を書いたりする作業を行った。作業は学習者の得意なことを活かして分担され、文章の内容を確認しながら積極的に進められた。「紙芝居をつくる[練習]」では、発音の確認や紙をめくるタイミングなど熱心に練習し、実際に紙芝居の木枠や楽器を使ってのリハーサルも行った。「紙芝居をつくる[発表]」では、セリフの部分で声色を変えたり、結びの言葉（「おしまい」「めでたしめでたし」など）をユニゾンで言ったり、それぞれのグループで工夫が見られた。

## ファシリテーター所感

第3回目のワークショップは、学習テーマ・教材を自由に選択しプログラムを構成した。「紙芝居をつくる」というグループワークの中で、学習者同士の日本語によるコミュニケーションがたくさん行われており、楽しんでいる様子が見られた。絵を描く活動によっても、それぞれの得意な部分を認め合うことができていたと思われる。また、ファシリテーターの実演を見た後にはモチベーションが高まり、発音を細かく確認してくり返し練習するなど、よりよい表現にしたいという気持ちが見て

取れた。宿題の発表（「お話のシェア」）では、本来の日本語レベルよりも高いものを準備して苦勞している学習者もいたため、宿題をどのような形で出すかは、今後プログラムをつくる際に検討すべきポイントだと感じた。

## 学習者アンケートより

- 東京芸術劇場のみなさんのShowはとてもおもしろかったです。
- みなさんといっしょにがんばることはすばらしかったです。お話や勉強がとても楽しかったです。ありがとうございました。♡
- みんなと一緒にお話をきめること、それで役割を分けてやりました。ラリナさんは絵の描くことが上手なことを知りました。
- このクラスはそんなにたのしいのをしらなかった。とてもたのしかったです。みんなといっしょにcommunicationよくできます。私からもさんかしゃみんなにありがとうございます。（※以上、原文ママ）
- 芸術劇場の先生はとても面白い物語を話しながら、授業してくれました。このやり方は、面白くて分かりやすく、大好きです。また、ののさんはずっと私たちを励まし、私たちが自信を持って最高の状態でいられるようにしてくれました。（※原文中国語）
- 実際に言ってみるのが大事だということに気がきました。（※原文英語）
- 私がある部分を読むのに苦勞したとき、ヘルパーさん（注：ファシリテーター）や他のクラスメイトが助けてくれた。ヘルパーさん（注：同上）もとても協力的でフレンドリーだった。（※原文英語）
- 他の生徒と一緒にできたのが、他の人からアイデアやサポートを得ることができてよかった。今日のアクティビティは日本の伝統を学ぶことができて特に好きだった。また、授業の最初に他の生徒の話を書くのも楽しかった。（※原文英語）

# 第3回

実施日時・会場 2021年11月27日（土）10:00-12:30 学習院大学

ファシリテーター 史桜、前嶋のの（サポーター：中村一規）

学習者人数 ぐんぐんクラス 10名

テーマ 紙芝居をつくってみよう、やってみよう  
\*学習テーマ・教材を自由に考案しプログラムを構成した。

目標

- 日本の文化「紙芝居」「昔話『桃太郎』」を知る、触れる、親しむ。
- 古くから伝わる文化（紙芝居・昔話）を通して、新しい言語に触れる（覚える・理解する）。
- 日本語を使って、自分の言葉（絵、作文）で、物語を伝えることができる。

## プログラム内容

### 1.デモンストレーション「紙芝居を見てもらう」

「紙芝居を見てもらう」では、まずファシリテーターの実演する紙芝居『桃太郎』を見てもらった。紙芝居専用の木枠を使い、楽器を使って鑑賞効果を高めた。

### 2.プログラム「自己紹介」「お話のシェア」

「自己紹介」では、サークルになって座り、一人ずつ名前と出身国、好きな食べものを紹介していった。「お話のシェア」では、宿題にしていた「自分の知っている物語（自分の国でも日本のものでもOK）」を一人ずつ語り、調べてきた内容についてメモを見ながら発表した。



## 第4回

実施日時・会場 2021年12月25日(土) 10:00-12:30 学習院大学

ファシリテーター 前嶋のの、関根好香(サポーター:史桜)

学習者人数 わくわくクラス 5名

テーマ 歌うこと・自分のことを話すこと・人の話を聞くこと  
\*学習テーマ・教材を自由に考案しプログラムを構成した。目標  
・日本の歌に親しみながら言葉を学ぶ。  
・楽しみながら自分のことを日本語で紹介できるようになる。  
・相手のことを日本語を通して知る。

## プログラム内容

1ウォーミングアップ「カウントシェイク」  
「わたしあなた」

椅子に座ってサークルになり、一人ずつ名前を確認してからワークを始めた。その後、手足を振りながら8まで数を数え、1ずつ数を減らしていく「カウントシェイク」を行い、体を動かしながら声を出すウォーミングアップを行った。

「わたしあなた」は、サークルの向かい側にいる学習者のところへ移動し、「わたし・あなた」と言って自分と相手を指差し、位置を交代する。そして、リレー形式で全員に「わたし・あなた」とバトンを渡していく。「わたし・あなた」の次に「名前(自分)・名前(次の人)」に変え、その後は「こんにちは、名前(次の人)さん。これ、どうぞ」「ありがとうございます」と、贈りものを贈り・受け取る会話に展開した。贈りもののイメージをマイムで加えていき、学習者は自由に変化させながら次の人へ渡していった。

2プログラム  
「切手のないおくりもの(曲に慣れる・歌詞を理解する・動きをつける・歌ってみる)」

まずは、「切手のないおくりもの」をギターの伴奏(生演奏)でファシリテーターが歌った。その後、曲に慣れるために何度か歌い、学習者も声を出して一緒に歌った。歌いながら、小さな打楽器を持ち、音楽に合わせて自由に鳴らした。「ラララ」で歌えるようになったら、歌詞カードを見ながら歌の内容を確認し、歌詞で歌えるようになり繰り返し練習した。その後、歌詞に合わせた動きを分担して考え、動きながらギターの伴奏に合わせて歌った。

3プログラム  
「切手のないおくりもの(宿題のシェア)」

この時間では、宿題にしていた「贈りたい人とも」を全員に聞いて黒板に書き出し、それを歌詞に当てはめて歌った。

4メインプログラム  
「わくわくトークショー[宿題のシェア]」  
「わくわくトークショー[発表]」

「わくわくトークショー[宿題のシェア]」では、宿題にしていた「出身・仕事・好きなこと」を全員に聞いた。続いて、「わくわくトークショー[発表]」のための練習に移った。トークショーの内容は、「画家」・「スポーツ選手」・「ミュージシャン」の中から、どれかの職業に扮してトークショーのゲストとして登場し、司会者(ファシリテーター)から、「出身・仕事・好きなこと」と「贈りものをしたい人とも」についてインタビューを受け、最後に「切手のないおくりもの」を歌うという流れである。まずは、ファシリテーターが「ミュージシャン」に扮してデモンストレーションを実施し、その後、練習の成果を発表した。学習者は、小道具(ベレー帽や金メダルなど)を自由に選びながら演じた。



## ファシリテーター所感

第4回目のワークショップは、規定のカリキュラムから離れて学習テーマと教材を自由に選択し、プログラムを構成した。音楽と楽器を使うことによって雰囲気や和らぎ、また繰り返し歌うことで日本語の歌詞に親しんでいったと思われる。歌詞に合わせる動きを考えたり、トークショーで発表する場面では、遊び心を持って取り組んでいるのが見て取れた。学習者が解説を理解できていないこともあったが、サークル状になっていることもあり学習者同士の助け合いが見られた。最後のトークショー

については、小道具で雰囲気づくりを行っていたが、セットなどで工夫をすると一層内容に入り込めたかもしれない。また、ゲストの職業を設定したことが自己紹介との混乱を生んだため、分かりやすい設定、または詳しい解説が必要だったと感じられた。

## 学習者アンケートより

- 先生はとてもユーモラスです。先生は素晴らしいです。今日の授業とても幸せです。
- 日本語のうた、とてもおもしろいです。
- 歌を歌う楽しかったです。(※以上、原文ママ)
- とても楽しく日本語を学ぶことが出来ました。エネルギッシュな先生方でとても楽しかったです。歌も演じるのもどちらも楽しかったです。(※原文英語)



## 第5回

実施日時・会場 2022年2月26日(土) 14:00-16:30 東京芸術劇場

ファシリテーター 柏木俊彦、松岡大、史桜

学習者人数 わくわくクラス+ぐんぐんクラス11名、  
学習院大学院生ら4名テーマ 日本語とつながるワークショップ  
「このコトバは、どんなカタチですか?」  
\*授業の時間外開催となる今回は、学習テーマは全て自由に考案しプログラムを構成した。目標  
・演劇や身体表現を通して、日本語での表現を増やす。  
・日本語でのコミュニケーション能力を育むきっかけになる。  
・受け身ではなく、自身がコミュニケーションの主体となって日本語を使うための自信を育む。

## プログラム内容

## 0ミニ劇場ツアー

ワークショップ前に15分ほどの劇場ツアーを実施。ガイドは「やさしい日本語」を使って劇場について解説を行い、屋上に移動して風景を楽しんだ。

1ウォーミングアップ「バースデライン」  
「棒のゲーム」

まずは、サークルになって座り、名前を全員で復唱し、スピードアップしていく。「バースデライン」は、言葉を使わずに1分間で誕生日順に並ぶワークである。時計のように3・6・9・12月の数字のカードを置き、並ぶ場所の目安にした。並び終わったら全員に誕生日を聞き、誤りがないかを確認し、改めて「名前・誕生日・出身国」で自己紹介した。

「棒のゲーム」では、ペアになり棒を人差し指だけで支え合い落とさないようにするゲームを行った。方向を表す言葉(上・下・右・左など)を確認し、ペアのうち一人が方

向を表す言葉を言いながら動き、もう一人がそれに合わせ動いた。半分に分かれて、お互いの動きを見合った。最後に、一人一本の棒を持ち、全員でひとつにつながり落とさないようにした。



## 2 プログラム「早く並ぶゲーム」

「早く並ぶゲーム」では、3つのグループに分かれ、グループ内でお題に沿って順番に並び、並んだ速さで順位を競うゲームである。お題は、〈背の高さ〉〈昨日の夜ごはんの時間〉〈日本に何年いますか?〉の3つであった。答え合わせの際には、「誰と何時に食べましたか?」など、インタビューを交え、学習者のコメントを引き出した。



## 3 プログラム「ナイフとフォーク」

「ナイフとフォーク」は、ペアになり、出されたお題を相談せずに身体でその形を表現するというワーク。最初にファシリテーターのデモンストレーションを見てから、〈ねことねずみ〉〈先生と生徒〉などいくつかのお題で行うと、ポーズのみならず、少しずつ動きのある表現に発展していった。

## 4 メインプログラム「形をつくるゲーム」「発表」

「形をつくるゲーム」では、相談しながら4人組でものの形を表現した。「車」や「恐竜」など、各グループを見合う時間を設けて、それぞれの工夫しているポイントなど確認しながら進めた。最後に、全体を半分のグループ(8人ずつ)に分け、「日本の春」というテーマでシーンをつくった。グループで、どういう表現にするかディスカッションしながらシーンを創作した。「発表」では、ファシリテーターが即興で照明と音楽をつけ、それぞれの成果を披露した。暗転から始まる本番の雰囲気を楽しみ、発表後には演じた人と見ていた人が一緒にふり返りを行った。

## 5 フィードバック

ワークショップ開始から発表までの写真を、プロジェクターを使用してスライドショーで流し、ファシリテーターがコメントしながら見ていった。その後、サークルに座り、参加者が書いた感想の言葉や絵などを全員でシェアした。



## ファシリテーター所感

第5回目のワークショップは会場を東京芸術劇場内とし、学習テーマと教材を全て自由に構成した。日本語レベルの異なる2つのクラス合同での開催だったが、これまでの経験も作用したのか、とても前向きに取り組んでいた。プログラムは段階を踏みながら少しずつ自分について話す内容となっていたため、ワークが進む中でお互いを知ることができ、後半のグループワークもスムーズにできていた。また、広い部屋にマットを敷いて靴を脱いで行ったことにより、表現の中で寝転がったりするなど身体を自由に動かしていた。後半のプログラムでは、徐々に表現に対する欲が出てきているのが窺われた。特に最後の発表では、即興的で遊び心のある表現が生まれていた。これには、照明と音響による雰囲気づくりも影響していたと思われる。ワークで用いるテーマによっては、学習者が持っている知識によって表現が狭まってしまうものがあったため、それぞれが理解して自由に表現できるものを選択するほうが、会話が広がり、お互いの理解が深まっていくのではないかと感じた。

## 参加者アンケートより(原文ママ)

- みんな一緒に日本の春をつくる時、ちょっとつかれた。でも本当にたのしかったです。そのようにイベントに参加したいです。ありがとうございました。
- 友達たちとあそびする たのしかったです。ありがとうございます。よろしくおねがいします。
- 好きなゲーム 棒のゲーム、猫とねずみ、車、恐竜、日本の春
- The non-verbal communication part was fun.さんのんの せんせいは すばらしかった
- ぼう(注:棒)、きょうりゅう ということば きょうべんきょう できました。まへは そのことば わかりません。せんせい たちもやさしく、ありがとうといいたい。◎
- かさみ(注:はさみ)とかみのゲームで だいせんせいの かみのidea が とてもたのしかったです。
- 最後の発表が一番楽しかったです。棒のゲームやナイフとフォークのゲームなどがあったから最後恥ずかしがらずにできました。
- 身体をうごかして、普段あまり関わったことのない学習者の方と一緒にかたちをつくりあげていくのが楽しかった。

たのしかったです。  
日本が人たのこ  
かいしゃではともたちかたことか  
できませんでしたとおもいました。  
しかし、今みんなかむたいで  
いたとかんじました。  
ほとにありかとうございまして。

ぼうはすごく きほん  
のものでも ~~きほん~~ しても  
おもしろかた。ちよ  
びくりしました。

「棒であそぼう」みんなの輪になるのが  
難しかった！  
最後にみんなが桜の木の下でピクニック  
楽しかったー!!  
初めての会は人たちとも仲良くなった  
☺️

## 演劇の専門家による日本語活動からの学び

金田智子 (学習院大学 文学部 教授)

「学習院大学わくわくとしま日本語教室」は豊島区及び近隣にお住まいの方が生活に必要な日本語能力を身に付ける場で、本学の大学院生らが中心となって運営しています。学習者は30代、40代が多く、平日は仕事や育児で忙しくしています。

昨年5月末に東京芸術劇場の田室寿見子さんから、多文化共生に向けたアートプログラムを展開するにあたり、連携して何かできないだろうかというご連絡をいただきました。外部団体からの申し出、それも、演劇のプロ、パフォーマンスの専門家との連携ですので、滅多にない大きなチャンスだとこの提案に飛びつきました。

実は、日本語教育に演劇的手法や演劇そのものを取り入れることはこれまでも行われています。しかし、日本語学習の初期段階で演劇を本業とする方が授業を担当する、というのは非常に珍しく、初歩レベルの大人の学習者がいったいどんな反応をするのか、そして、大学院生たちは演劇の専門家による日本語活動をどう捉えるのか、とても楽しみでした。

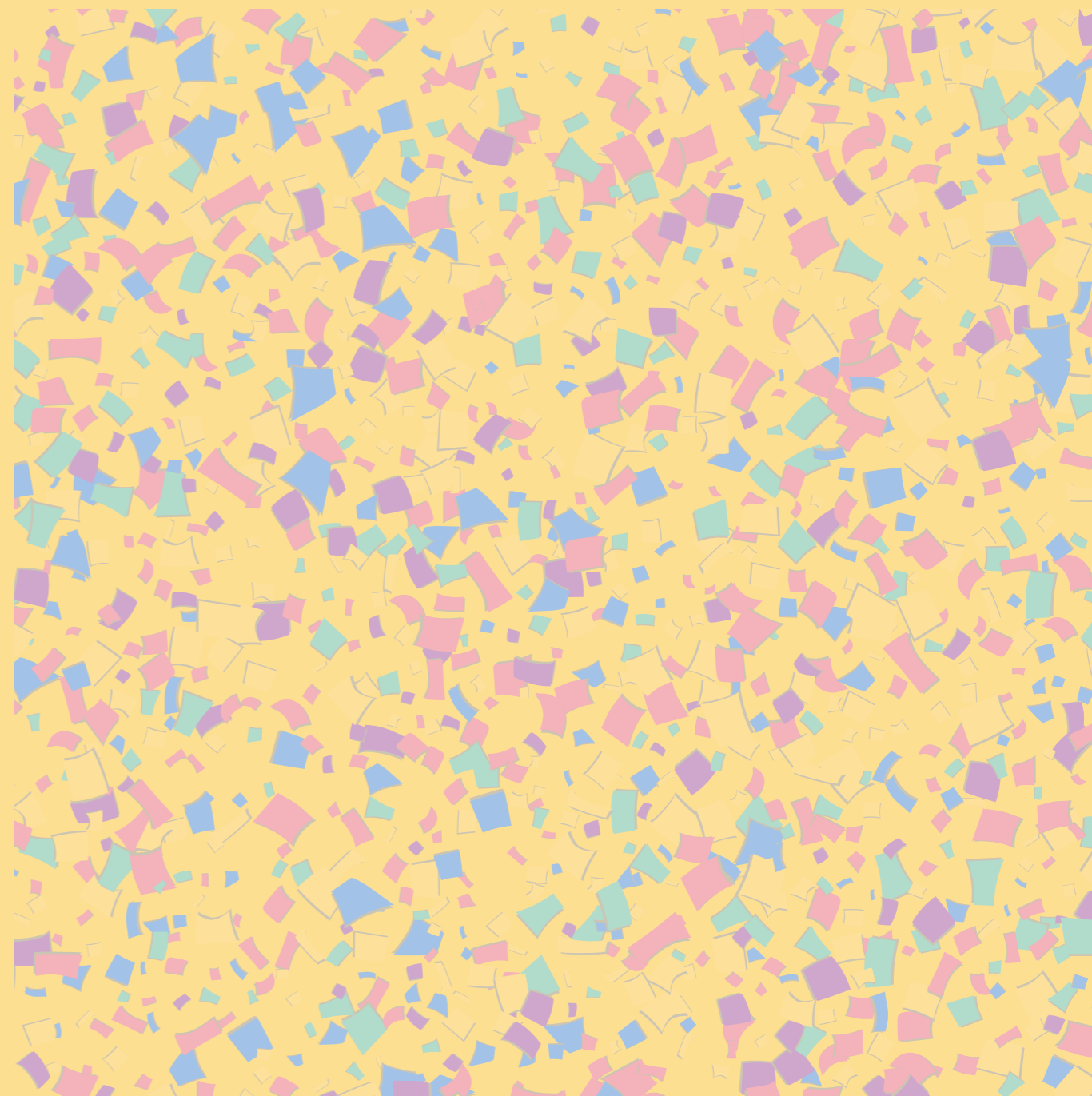
ご担当いただいたのは、通常授業の内容を踏襲する2回、自由な内容の2回、そして、レベルの異なる2クラスを合同で、そして日本人も加わる回の計5回です。それぞれ2～3時間、体全体を動かしながら声を出したり、自由に振りをつけながら歌ったりといった、通常行ったことのない活動が繰り広げられました。「恐竜」「日本の春」といった言葉のイメージをチーム内ですり合わせ、協力して体で表現するというも行いました。「ファシリテーター」であるパフォーマーの方々は各回について、「気が付いたら数多くのやりとりをし、相手に伝わる言い方ができるようになっていた」「表現するってうれしいと感じてもらおう」「コミュニケーションの主体となる」などの方針をお持ちでした。その方針の結果が表れた例を紹介します。

「初診受付」の回です。受付にやってきた患者を演じられるようになるまで、様々な活動を段階的に積み重ねま

した。演じること自体もゲーム的要素を加えながら複数回行い、「足がすごく痛い」と足を引きずってやってくる迫真の演技に、教室は温かい笑いに包まれました。そして、活動が全て終わり、感想を聞かれた学習者は「せなか、ゆび、あたま、うで、ひざ(膝)、いたい、かゆい、お(折)れてる」と、何も見ずに口にしたのです。意味のある言葉として何度も聞いたり使ったりしているうちにいつの間にか覚えてしまった、ということでしょう。人はいかにして言葉を身に付けていくのか、ということを再認識させられた瞬間でした。

教育・学習のあるべき姿についても考えさせられました。第5回の「棒のゲーム」です。ペアになって、1メートル位の長さの棒の端と端を指先で支え合い、一方の人の「右」「座って」といった指示に基づいて動くというもので、相手の声をしっかり聞き、お互いの様子を感じ取りながら動かないと棒はすぐに落ちてしまいます。指示を少なくし、簡単な動きだけにしてあげれば、棒は落ちません。しかし、どのペアも用心深く動き始め、棒を落とさないで済む限界を探りながら、相手に配慮しつつ力を合わせ、指示をどんどん出すようになっていきました。人は、強制されなくてもその活動が面白ければ今できることの少し先のことに挑戦し続ける、そして、それが相手との協働の中でも起こる。言語教育の在り方についてあらためて考えようと思いました。

5回の実践について、参加した学習者の満足度は非常に高いものでした。その要因については、大学院生達と分析を始めたところです。今回見せていただいた多様な活動、そして、分析結果からわかることを今後のコースに生かしていきたいと考えていますが、こうして振り返ってみると、今回の連携は私自身にとって大きな学びの機会となりました。こういった連携は、日本語を学ぶ人にとっても、学ぶ場を用意する側にとっても意味がある、そのことを今後、多くの方に経験してもらえたらと思っています。



東京芸術劇場  
劇場ツアー  
Tokyo Metropolitan Theatre  
Guided Tour

劇場ツアー 〈やさしい日本語〉 編



劇場ツアー〈やさしい日本語〉編



劇場ツアー〈やさしい日本語〉編とは

東京芸術劇場では、劇場内の様々な場所を回って舞台芸術に触れ、劇場を身近に感じてもらうことを目指し「劇場ツアー」を定期的に開催しています。この劇場ツアーに、日本に住む外国人の方や外国にルーツをもつ方にも気軽に参加し楽しんでいただけるよう、〈やさしい日本語〉の解説で巡るツアーの実施を予定しています。2021年度はプログラムを開発し、関係者を招いてパイロット版ツアーを行いました。

\*〈やさしい日本語〉とは、外国人等にもわかるように配慮して、簡単にした日本語のことです。(東京都生活文化スポーツ局HP(2022)より)

実施データ

●パイロット版ツアー①

2022年1月26日(水) 17:00-18:00 参加者数:5名

●パイロット版ツアー②

2022年2月20日(日) 10:00-11:00 参加者数:15名

※両回とも多文化共生関連の有識者・関係団体スタッフ・外国にルーツをもつ方々が参加

ツアー内容

ツアーガイドの案内で芸劇を巡り、館内外にある数々の美術品、パブリック・スペースの楽しみ方、ホールの特徴などを解説。さまざまなエピソードを交え、複合施設ならではの魅力をご紹介します。劇場の使用状況や、参加者の興味関心、日本語レベルなどに応じて内容は相談の上、その都度調整する予定です。

●モデルルート(2022年2月20日実施内容)

1 アトリウムに集合。芸劇の特徴を紹介

2 劇場を外から眺め建物を解説。劇場内外にあるパブリックアートを紹介

3 本番を控えたコンサートホールに入り、客席とコンサートの雰囲気を感じ

4 屋上へ上がり、池袋の街と芸劇の成り立ちを感じてもらう



実施にむけてのポイント

日本語が母語でない方も楽しめるよう、固有名詞や劇場の機構など、言葉だけでは伝わりづらいことは、図や写真を使ったフリップなど、視覚的なイメージを多用しながら解説しました。レクチャーのような一方向型ではなく、一緒に体験するアクティビティの側面を意識してツアー内容を設定しています。今後は参加者同士の交流の要素を増やすなど、劇場や舞台表現を身近に感じるための仕掛けをツアーの中で検討していきます。



実施までの流れ

- 2020年 定期実施中の劇場ツアーを〈やさしい日本語〉化し、実施することを検討し始める。
- 2021年春 年度内の実施に向け、多文化共生の研究者・〈やさしい日本語〉の実演者などを招き通常ツアーの見学と講評を頂く。定期的に多文化共生のアート企画の勉強会、〈やさしい日本語〉の研修などに参加。
- 2021年秋 ツアールートや解説内容の検討。ツアーの〈やさしい日本語〉化を進める。
- 2022年冬 デモツアー、パイロットツアーを実施。フィードバックを頂きツアーの充実を図る。
- 2022年春以降 定期的にツアーを実施予定。外国人支援団体、日本語教室生徒、留学生など参加者に合わせてツアーを行う。

フィードバックより

パイロット版ツアーのあとにフィードバックを実施しました。専門家や日本語が母語でない方々のご意見を頂き、内容のブラッシュアップを重ねていきます。

※フィードバックのコメント・今後の課題

- ガイドの話し方、日本語、内容、フリップの工夫など、全体的にわかりやすかった。
- 日本語能力試験N3~4の人は日本語を理解できても実際に使う機会が少ないので、こういうツアーで応用できるのは良い。
- もう少し日本語ができない人たちの層が参加者としては多いと予想される。その人たちを対象にするのであれば、もう少し内容、伝え方に調整が必要。
- ターゲットをどの層にするのかをもっと明確にすることが大事。万人向けは難しい。
- 説明を聞くだけでなく、インタラクティブなコミュニケーションが欲しかった。
- ツアーの次のステップとして公演に来たいと思っても、そのチラシやサイトが〈やさしい日本語〉・多言語に対応していない。
- 通常ツアーに比べて情報量が減っている。参加者が元々アートに興味のある場合、物足りなく感じるのでは。



## 参加者のアンケートより

- とても興味深く、劇場やスタッフの印象が良かったです。日本語もとてもわかりやすく好感が持てました。(20代 日本滞在歴：2年)
- 日本語をよく話せない人たちのものであるので、劇場をテーマにした語彙をより多く学ぶための良いツールになるかもしれません。(30代 日本滞在歴：1年半)
- とてもわかりやすかった。ハンドジェスチャーが助けになった。(20代 日本滞在歴：6年半)
- 映像や生で、アーティスト（出演者）からの言葉があるとよかったです。映像・写真で満員の客席が見れたらよかったです。(30代 日本滞在歴：1年半)



## 寄稿

多文化共生社会へ向けて：劇場ツアー「やさしい日本語版」パイロットツアー感想  
三代純平（武蔵野美術大学 造形学部 教授）

2月20日に劇場ツアー「やさしい日本語版」パイロットツアーに参加させていただきました。コロナ禍で足が遠のいてしまった劇場に久しぶりに足を踏み入れ、独特の静寂と非日常的な世界が始まりそうなわくわく感を味わうことができました。また、劇場ツアーでは、普段何気なく通り過ぎてしまう劇場を彩る作品についての解説を聞いたり、普段立ち入ることができない舞台裏を見学したりすることができ、より劇場を身近に感じることができました。このような経験を、やさしい日本語を通じて、より広い人々に体験してもらおうことができるのはとても素晴らしいことだと思います。当日は、やさしい日本語とジェスチャーやイラストといったビジュアルによって説明が行われ、ツアーが想定した日本語能力試験N3レベルの日本語話者にとって概ね内容が理解できるものでした。内容も精査されており、担当の方々が丁寧に準備を積み重ねてきたことが窺われました。またガイドの方々の表情や態度はホスピタリティに溢れ、母語ではない日本語による

ツアーに緊張している参加者も安心した気持ちでツアーに参加できたと思います。

さて、現在、さまざまな形で普及しているやさしい日本語には、情報伝達の役割と交流の役割があります。つまり、やさしい日本語により情報へのアクセスを保障することやさしい日本語により地域住民のコミュニケーションの機会を拡充することです。多文化共生社会の成熟を見据えるならば、後者の役割も非常に重要になります。今後、このやさしい日本語によるツアーが後者を射程に入れることができるならば、多文化共生社会における劇場の意義というものの方がより大きくなるように門外漢ながら思います。

加えて、留意しなければならないことは、やさしい日本語は、しばしば日本社会は日本語を単一言語とした社会であるということを暗黙の前提にしてしまうことです。意図とは別に単一言語主義に陥らないためには、多様な言語資本を複合的に用いたコミュニケーションのあり方も同時に検討することが求められます。

今後、やさしい日本語ツアーがことばとアートを結び、多文化共生を発信する場としてますます発展することを期待しております。



## シアター・コーディネーター養成講座

## シアター・コーディネーター養成講座



## 事業について

東京芸術劇場では、劇場を広く社会に開き、芸術文化を通して地域・社会づくりに貢献する人材育成を目指す「シアター・コーディネーター養成講座」を実施しております。

この講座の一環として、《多文化共生・基礎編》を開催しました。前半では、現在の多文化社会をどう捉え、それに対しアートがどうアプローチできるかを、実践例や現状・課題から学び、後半は劇場と社会をつなぐ企画を、グループワークを通して考えました。



## 事業データ

日程：2021年11月～2022年2月（全6回）  
会場：東京芸術劇場内・オンライン併用  
受講者数：16名

## 講座内容

- **第1回：2021年11月21日(日) 13:30-16:30**  
オリエンテーション/多文化共生とアート概論  
講師：楊淳婷（東京藝術大学大学院 国際芸術創造研究科 特任助教）
- **第2回：2021年12月4日(土) 13:30-16:30**  
ケーススタディ①地域コミュニティの連携～親子で国際交流  
講師：三代純平（武蔵野美術大学 造形学部 准教授）  
福村真紀子（「多文化ひろばあいあい」代表/茨城大学大学院 理工学研究科 助教）  
スラマ・ソニア（チュニジア出身/「多文化ひろばあいあい」メンバー/外国語教師）
- **第3回：2021年12月11日(土) 13:30-16:30**  
ケーススタディ②外国にルーツをもつ青少年の課題とドキュメンタリー演劇の実践  
講師：小島祥美（東京外国語大学 多言語多文化共生センター長/世界言語社会教育センター 准教授）  
田室寿見子（東京芸術劇場 人材育成担当係長）
- **第4回：2021年12月18日(土) 13:30-16:30**  
ケーススタディ③多文化・多言語社会に生きる子どもたちとのワークショップ  
講師：松井かおり（朝日大学 保健医療学部 教授）  
田室寿見子（東京芸術劇場 人材育成担当係長）
- **第5回：2022年1月15日(土) 13:30-16:30**  
中間発表&ディスカッション
- **第6回：2022年2月27日(日) 13:30-16:30**  
企画発表&フィードバック

## 企画発表内容

- **Aチーム**  
Ligno Cafe @ GEIGEKI～外国にルーツを持つ子供たちと共にGEIGEKIで成長しよう～
- **Bチーム**  
上野・浅草 グローカル街歩き 食×アート
- **Cチーム**  
PROJECT CIRCLE ○があなたとわたしをつなぐ（町で○探し/○○アート/映像作品制作/SNSリレー）
- **Dチーム**  
WARAKAWA Dance⇔Dance Project

## スタッフ

- **企画監修**  
宮野祥子（桜美林大学 芸術文化学群 非常勤講師）、  
楊淳婷（東京藝術大学大学院 国際芸術創造研究科 特任助教）
- **グループワークサポーター**  
宮野祥子、柏木俊彦、関根好香、豊島勇士

\*講師の所属、役職等は当時のものを使用しています。

## 講師プロフィール

### ● 楊 淳婷(ヤン チュンティン)

台湾台北市生まれ。国立政治大学(台湾)卒業。2019年に東京藝術大学で博士号取得(Ph.D./芸術環境創造分野)。自身の経験から移住や移民、社会とアートの関係性に関心を抱き、博士課程ではアートプロジェクトの企画・運営に携わりながら、「多文化社会、社会包摂とアート」をキーワードに研究・フィールドワークを実施。2019年度はアートプロジェクト「イミグレーション・ミュージアム・東京」の企画統括を担当。主な論文は「アートによる多文化の包摂：日本人の外国人住民に対する『寛容な意識づくり』に着目して」(2016)、「アートプロジェクトにおける外国人住民の表象と社会包摂—映像展示作品『Their history, to be our story』を事例に」(2019)など。現職は東京藝術大学国際芸術創造科特任助教。立教大学社会学部兼任講師。

### ● 三代純平

武蔵野美術大学造形学部教授。博士(日本語教育学)。仁川外国語高等学校、徳山大学等を経て、2013年より現職。専門は、日本語教育におけるライフストーリー研究、社会連携による日本語教育実践。主著に、『産学連携でつくる多文化共生-カシオとムサビがデザインする日本語教育』(2021年、くろしお出版、共著)、『ナラティブでひらく言語教育-理論と実践』(2021年、新曜社、共著)など。

### ● 福村真紀子

子育て支援サークル「多文化ひろば あいあい」主宰。茨城大学大学院理工学研究科(工学野)数理・応用科学領域助教。博士(日本語教育学)。地域日本語教育の在り方を主なテーマとして実践研究を行う。特に、外国から日本に移住した子育て中の女性の孤立の問題に着眼し、彼女たちに対する日本語教育についての検討を重ねる。また、地域の行政組織・民間団体・大学との連携による地域日本語教育のプロジェクトをテーマに、多文化共生に向けた地域日本語教育の再構築を目指す。

### ● スラマ・ソニア

チュニジア出身。2001年に夫の日本赴任により来日、翌年長女を出産。妊娠、出産、育児を日本で初体験するなかで日野市の子育て支援グループ「多文化ひろば あいあい」に参加。高等学校での外国語指導助手(ALT)を経て、現在は、フリーランスで英語、フランス語、アラブ語の外国語教師をするなど、国際理解教育の指導者として言語や料理などを教えている。

### ● 小島祥美

東京外国語大学 多言語多文化共生センター 准教授。博士(人間科学)。小学校教員、NGO職員を経て、一地方自治体(岐阜県可児市)の全外国籍の子どもの就学実態を日本で初めて明らかにした研究成果により、同市教育委員会の初代外国人児童生徒コーディネーターに抜擢されて不就学ゼロを実現。大学生と地域の連携を推進する教育センター(コミュニティ・コラボレーションセンター)開設に伴って愛知淑徳大学に着任し、愛知淑徳大学教授を経て、2020年9月より現職。文部科学省「外国人学校の各種学校設置・準学校法人設立の認可等に関する調査委員会」「夜間中学設置推進・充実協議会」委員をはじめ、全国各地の自治体の外国につながる子どもの教育にかかわる委員を歴任。現在は文部科学省外国人児童生徒等教育アドバイザーの一人。

### ● 松井かおり

朝日大学保健医療学部教授。留学生別科別科長。多文化こどもエデュニホ☆ニコ代表。博士(学術)。専門は、英語授業研究、コミュニケーション論。近年は、海外にルーツがある子ども達と日本人児童・生徒の協働学習の方策に関心をもち、応用ドラマや写真、工作など身体とアートをを用いた学習環境づくりを探究している。外国人集住地区においては、外国人児童・生徒の支援団体を立ち上げ、教育行政と学校、支援団体が協働するコミュニティーを基盤とした教育体制づくりを模索中である。

# 2021年度 多文化共生に向けた アートプロジェクト記録集

デザイン 久保さおり

編集 東京芸術劇場

編集協力 noi株式会社

発行 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場  
〒171-0021 東京都豊島区西池袋1-8-1  
03-5391-2111(代)

2023年3月発行

©Tokyo Metropolitan Theatre 2023

Printed in Japan

掲載されている文章・写真の無断転載を禁じます。

東京芸術劇場  
Tokyo Metropolitan Theatre

東京芸術劇場

Tokyo Metropolitan Theatre